

# ゼロ助詞の談話機能と文法機能

加藤重広

キーワード：ゼロ助詞，脱焦点化機能，談話機能，全体と部分の関係

## 本稿の構成

1. はじめに
2. 助詞の脱落
3. 《ゼロ助詞》と助詞の省略
  - 先行研究と問題の所在 —
  - 3.1. ゼロ助詞と助詞の省略は異なるか
  - 3.2. 先行研究
  - 3.3. 松下大三郎
  - 3.4. 筒井通雄(1983)
  - 3.5. 尾上圭介(1987)
  - 3.6. 丹羽哲也(1989)
  - 3.7. 甲斐ますみ(1991, 1992)
  - 3.8. 大場美穂子(1994)
  - 3.9. 丸山直子(1995, 1996a, 1996b)
  - 3.10. 大谷博美(1995a)
  - 3.11. その他の先行研究
  - 3.12. 《ゼロ助詞》の定義
4. 格と無助詞
  - 4.1. ガ格
    - 4.1.1. 主格のガ格
    - 4.1.2. 対格のガ格
  - 4.2. ヲ格
    - 4.2.1. 対格のヲ格
    - 4.2.2. 場所格のヲ格
  - 4.3. ニ格
    - 4.3.1. 存在の場所のニ格
    - 4.3.2. 移動の着点のニ格
    - 4.3.3. 動作の相手を表すニ格
    - 4.3.4. 動作の対象を表すニ格
    - 4.3.5. 状態の対象のニ格
    - 4.3.6. 移動動作の目的のニ格
    - 4.3.7. 受動文に現れるニ格
    - 4.3.8. 使役文に現れるニ格
    - 4.3.9. 連用成分を示す「に」
  - 4.4. デ格
    - 4.4.1. 場所のデ格
    - 4.4.2. 道具・手段のデ格
    - 4.4.3. 材料のデ格
    - 4.4.4. 原因のデ格
    - 4.4.5. 限定的な範囲を表すデ格
    - 4.4.6. 動作主体を表すデ格
    - 4.4.7. 様態のデ格
    - 4.4.8. 限度のデ格
    - 4.4.9. 基準のデ格
    - 4.4.10. デ格のまとめ
  - 4.5. ト格
  - 4.6. その他の格
  - 4.7. 総主文など
  - 4.8. 格と無助詞の対応のまとめ
5. 《ゼロ助詞》の機能
  - 5.1. 脱焦点化機能
  - 5.2. 《ゼロ助詞》の数と文構造
    - 5.2.1. 名詞句が1つの文
    - 5.2.2. 名詞句が複数存在する文
      - 5.2.2.1. …ハ…ガ…のパターン
      - 5.2.2.2. …ガ…ヲ…のパターン
      - 5.2.2.3. …ガ…ニ…のパターン
      - 5.2.2.4. …ヲ…ニ…のパターン
      - 5.2.2.5. …ニ…ヲ…のパターン
      - 5.2.2.6. 3つ以上の名詞句を含む文
6. 結語 — 《ゼロ助詞》と省略は区別されるか—

## 1. はじめに

日本語の日常会話では、本来助詞が存在するような位置に助詞が現れない発話が頻繁に見られる。一般に日本語の場合、動詞と意味上関わりを持つ名詞（句）は格助詞を後接させてその意味的關係を明示できる。そして、動詞の意味的特質と関連させて、格助詞の意味や用法の記述をすることも行われている<sup>1)</sup>。本論文では、本来助詞が現れてしかるべき位置に助詞が現れない場合について考える。助詞がないという現象も実は単純なものではなく、いくつかのパターンに分けて考えることが可能である。そのうち、助詞が出現しないことが義務的である場合や逆に無助詞では非文となる場合などを検討しながら、その実態を考えていく。本稿では本来格助詞などの助詞があるべきところに助詞を欠くものを一括して《ゼロ助詞》<sup>2)</sup>と呼ぶことにする。また、本稿は主としてこの《ゼロ助詞》の談話における機能を明らかにすることを目的とする。

## 2. 助詞の脱落

多くの言語において名詞句は、通例なんらかの格表示を行う。文法範疇としての格表示の方法は言語ごとに多様であるが、日本語では格助詞を使って格表示が行なわれる。しかし、古来の日本語では単文であれば、「月、いでにけり」のほうがより一般的であって、「月がいでにけり」とはふつう用いなかった。つまり、単文（主節）においては、「が」「を」は出現しないのがふつうであった<sup>3)</sup>。これは文語、すなわち、書き言葉での現象であるが、現在では、書き言葉的な文体では助詞は脱落しないのがふつうである。しかし、現代でも話し言葉では助詞の脱落は頻繁に見られる。例えば、多くの地域方言で、無助詞の傾向が観察されている<sup>4)</sup>。ただし、古

1) 仁田（1993）では、動詞との意味関係上必須である NP を《共演成分》と呼び、動詞との意味関係上必須ではない要素を《付加成分》と呼び、両者を区別する。これは、仁田自身が認めるように、両者を判然と区別しきれないかどうかについては問題点も残る。また、《共演成分》《付加成分》どうしの間にも意味統語上の重要度という点で、ばらつきがある可能性もあり、とすれば、そもそも二分することに意味があるのかどうかという根本的な問題も出てくる。

仁田は「中国と条約を結ぶ」において、「中国と」も「条約を」も「結ぶ」の共演成分であるとするが、「X と結ぶ」の「X と」が果たして意味上「結ぶ」という動詞にとって必須かと言えば、必須とは言いがたいのではなかろうか。「X と」が仁田の言うように共演成分であるとするれば、それは「条約を結ぶ」に対してのはずである。とすれば、共演成分・付加成分を動詞に対して単層的に設定するだけではなく、動詞句も含めて複層的に設定せざるを得なくなってしまう。

寺村秀夫（1982：81-84）に示される「必須補語（primary complement）」と「副次補語（secondary complement）」も、仁田の共演成分・付加成分とほぼ同一の概念であるが、寺村は両者が峻厳と区別できないことを認めており、その中間に当たる「準必須補語」を設定している。

2) 加藤がかつて《無音形助詞》と呼んだものとはほぼ同一の概念である。これまで提案されたほかの名称については後で検討することにする。

3) 詳しくは金水敏（1996）などを参照されたい。

4) 逆に言うところ東京方言が助詞がもっとも多く出現する傾向にある。仁田義雄（1992）、井上史雄（1992）によれば、関西方言や東北方言などでは無助詞傾向が強い。特に秋田方言が最も無助詞の傾向が強い。

い時代の日本語（文章語）でも従属節中では、助詞を用いる方がふつうであって、「月のいでたる夜には…」のように言い、「月\_\_いでたる夜に…」とは通例用いなかった。この違いは、注目に値すると思われる。この事実から、そもそも格助詞の存在は任意のものであって、「格助詞とは、なくても成り立つがより意味を明確にするためにつける」のだという考えもあるほどである<sup>5)</sup>。しかし、「そもそも格助詞なしでも成立する」という前提を現代語の共時的記述にまで持ち込むのは正しくない。

1a) そのお菓子を太郎がまだ食べていないというのに、次郎は3つも食べてしまったんだよ。

1b) \*そのお菓子 $\phi$ 太郎 $\phi$ まだ食べていないというのに、次郎 $\phi$ 3つ $\phi$ 食べてしまったんだよ。

上の(1a)の格助詞を消去した(1b)は成立するとは到底言えないだろう。そもそもなくてもいいものが意味を明確にするために任意で加わるという考え方は、現代語では全く当てはまらない。

また、日本語の副助詞「は」「も」などは、いくつかの格助詞と融合してしまい、形態上は「は」「も」だけということも多い。一般に「が」「を」では、格助詞は「は」「も」といった副助詞に溶け込んでしまい、表示されない。この場合は、いわば格表示が行われていないと見ることが出来る。ほかの格助詞では、任意のものもあり、融合が不可能なものなど様々である<sup>6)</sup>。「は」「も」以外の副助詞でも「が」「を」については融合が観察されるが<sup>7)</sup>、それ以外では融合が例外的で、このことは格助詞に序列や階層を考える根拠にもなっている。

一般に、助詞の脱落の現象は、「は」と「が」という助詞の文法論の延長として捉えられることが多かった。また現在でも、尾上圭介(1987)、丹羽哲也(1989)、大場美穂子(1994)、丸山

5) 梅原恭則(1989: 313)などを参照。

6) 主な格助詞と、「は」「も」と「の」の融合の仕方を大まかに以下に示す。「ハ」とあるのは格助詞がなく、「ハ」だけの形のもの、「C+ハ」は格助詞に「ハ」の後接したもの(たとえば「に」であれば「には」の形)を意味する。

	ガ	ヲ	ニ	ヘ	デ	ト	カラ
ハとの結合	*C+ハ/ハ	*C+ハ/ハ	C+ハ/ハ	C+ハ/?ハ	C+ハ/?ハ	C+ハ/*ハ	C+ハ/*ハ
モとの結合	*C+モ/モ	*C+モ/モ	C+モ/モ	C+モ/モ	C+モ/*モ	C+モ/*モ	C+モ/*モ
ノとの結合	*C+ノ/ノ	*C+ノ/ノ	C+ノ/ノ	C+ノ/ノ	C+ノ/*ノ	C+ノ/*ノ	C+ノ/*ノ

7) 常に格助詞が消去されるわけではなく、どの格助詞にどの副助詞がつくかで変わってくる。副助詞は、取り立て詞と呼ばれるものとほぼ一致する。格助詞の消去は、①義務的に消去、②残存・消去は任意、③義務的に残存、と一定の規則性が観測できる。また、格助詞と副助詞の順序(「…にだけ」と「…だけに」の違いなど)も重要な問題ではあるが、今回は議論しない。次の(1)は、「牡蛎だけを」とすることもできるが、「\*牡蛎をだけ」は不可である。(2)は「\*おなかをまで」も「\*おなかまでを」も不可である。

1) 牡蛎だけ食べた。

2) おなかまでこわした。

いずれも「牡蛎を食べた」「おなかをこわした」と復元することは可能である。一般に復元可能であることが多く、復元形が複数あって曖昧なものはあるにせよ、復元不可能なものは非常に少ない。

直子(1996)、野田尚史(1996)をはじめとして、そういった視点が多い。ほかに、大谷博美(1995)など、談話における知識という観点からの考察もある。本論筆者は、この問題を単純に助詞の問題でしかないとも、談話における知識の問題でしかないとも考えない。これは、日本語の構文上の根本的な特質に大きく関わる問題だと捉えている<sup>8)</sup>。例えば、日本語の名詞(職能に重点を置けば「名詞」と呼ぶべきではないが)、副詞<sup>9)</sup>として文の構成要素になることが珍しくない。加藤重広(1997)で詳細に論じてあるが、数量詞はある種の原則と制約はあるものの、連体数量詞が副詞として現れることが珍しくない。

2a) 三人の男の子がやってきた。

2b) 男の子が三人やってきた。

また、これは数量詞に限ったことではない。

3a) 特別の関係

3b) 特別な関係

3c) 特別難しい課題があたってしまった。

(3a)(3b)に見るように、「特別」は名詞ともまた形容動詞ともとれるような活用形式を有している<sup>10)</sup>が、(3c)の例では「難しい」を「特別」が修飾しており、副詞と見なすべき機能を有している。(3c)の「特別」を、(3a)(3b)とは同音異義と見るか、同一の語でありながら機能や現れ方の違うものと見なすか、処理の仕方は様々である。ここでは、その扱いについては議論しないが、日本語において一般に名詞という品詞のもとに一括されている語群の中には、副詞のように用いられるものが含まれており、名詞が副詞として用いられる現象は、決して例外的なものではないという事実は見て取ることができる。これ以外にも、「去年」「昨日」など時を表す名詞の一部は格助詞なしでそのまま副詞として働き、かつ、その時点の動作や行為などを表す場合には格助詞が現れてはいけない<sup>11)</sup>。

4a) 昨日  、友人と食事した。

4b) \*昨日に、友人と食事した。

4c) \*昨日で、友人と食事した。

大まかに言えば、「昨日」や「明日」など発話の時点などを基準にして意味が決まる、いわば相対的な時点を表すもの(これを相対時称詞と呼ぶ)は格助詞をとらないが、「1993年」や「江

8) この点で、鈴木重幸(1972: 206-222)でいう「はだか格」という分類の仕方と通じる観点だとも言える。

9) 副詞として現れた数量詞は「遊離数量詞」などと呼ばれることが多い。用語法その他に関しては、加藤重広(ibid.)を参照されたい。

10) 形容動詞という範疇は、それをそのまま認めるという意見は少なく、別種の範疇を代替で立てるといった意見や、形容動詞やそれに変わる品詞そのものを設定しないという意見が大勢をしめる。詳しくは、加藤重広(1993)、Kato, Shigehiro(1995)を参照されたい。

11) 「昨日で今回の仕事は終わった」など「昨日まで」の意味になっているようなものは、その時点の動作や行為を表す場合という条件が合致しないので、ここでの議論には含まれない。

戸時代」など発話時点とは無関係に意味が確定できる、いわば絶対的な時点を表すもの（これを絶対時称詞と呼ぶ）は格助詞をとるといった原則がある<sup>12)</sup>。

名詞が無助詞で副詞的機能を持つという日本語全般に見られる現象が、本稿で主として扱う問題とどういった関わりがあるのかも、関心の対象である。格助詞を欠く時称詞や副詞を兼務しているかに見える名詞には、本稿では多くの紙幅を割くことがないが、全く無関係なテーマだとは考えていない。

次章では、先行研究を瞥見した上で、《ゼロ名詞》を定義し、どういった観点からの分析が必要かを論じる。

### 3. 《ゼロ助詞》と助詞の省略 — 先行研究と問題の所在 —

#### 3. 1. ゼロ助詞と助詞の省略は異なるか

大場美穂子(1994)は、「は」も「が」も使えない文について考察しているが、助詞が現れない文法現象を扱う上で、これを3つに分けている。1つ目は、「格助詞の省略といえるもの」で、これは、省略されている格助詞を復元しても意味上の差がない。2つ目は、「助詞『は』の省略といえるもの」で、これも、省略されている「は」を補ってもあまり意味が変わらない。3つ目は、「格助詞をつけた場合とも『は』をつけた場合とも意味が異なるもので、助詞の省略とは考えにくいもの」である。

本稿では、《単なる助詞の省略》と《ある種の機能を積極的に果たすゼロ助詞》を区別しないという立場をとる。つまり、形態的に助詞が現れていないものを便宜上すべて《ゼロ助詞》と見なすことになる。大場(ibid.)の言うように、単に助詞が省略されたと考えるべき用例も少なくないだろう。しかし、助詞がないという文構造の形態的特質にのみ着目すれば、つまり見かけの上では《助詞の省略》も《ゼロ助詞》も変わりがない。この点について先行研究は言及していないものもあるが、区別すべきとしているものもいくつかある。しかし、区別すべきとしているものでもどう区別するかについてはまったくもって曖昧なままである。この点については、この章の最後でもう一度触れるが、明確な区別の基準をたてることは難しい。

また、本稿では、《ゼロ助詞》の問題は談話文法の観点から扱うべき問題を多く含んでいると考えている。格助詞があると、ある条件下の発話としては不適切になる場合が多く見られる。その発話の中の文そのものが非文なのではなく、ある場面の発話として不適格だということは、いわば語用論的適切性に違反していると考えなければならない。

12) 無論、例外はある。「昨日の夜」は相対的な時点を表すが、「昨日の夜に来てくれればよかったのに」などのように、「に」が入ることがある。また、年表の文体などでは「昭和初期」のような絶対時称詞に含まれる表現でも、「昭和初期、金融恐慌始まる」のように無助詞で用いられることもある。

### 3. 2. 先行研究

ゼロ助詞（助詞の省略とある種の機能を持った無助詞を一括して論じているものも含む）に言及している研究は少なくない。定義は様々に異なるものの、いろいろな名称が提案されてきた。たとえば、「独立提示語」（山田孝雄（1908）」、「単説」（松下大三郎（1928, 19302b）」、「無形化」（渡辺実（1971）」、「はだか格」<sup>13)</sup>（鈴木重幸（1972）」、「不定格」<sup>14)</sup>（城田俊（1983）」、「無助詞格」（丹羽哲也（1987）」、「零形式」（石神照雄（1989）」、「ゼロ格」（楠本徹也・日本語教育学会での発表（1992）」、「無助詞」（丸山直子（1996）」などが主なものである<sup>15)</sup>。しかし、《ゼロ助詞》も《助詞の省略》も、「格」に関する機能を有しているわけではないので、「はだか格」「不定格」「無助詞格」「ゼロ格」などは用語法上不適切だと思われる。このことは《ゼロ助詞》の機能の問題と関連するので、第4章で再び取り上げる。そして、多くの場合、本稿で言う《ゼロ助詞》と《助詞の省略》がきちんと区別して論じられていない。丹羽（1987）や、丸山（1996）にも、助詞が用いられていない場合には、《ゼロ助詞》と《省略》の両方があるという主旨の記述はあるものの、どう区別するのは示されていない。

### 3. 3. 松下大三郎

まず、松下大三郎の言う「単説」について少し見ておこう。松下大三郎には、丸山直子（1996）、大場美穂子（1994）なども触れているが、瞥見しておくことにする。松下は、「そんな人、私、一向知りません」の中の「そんな人」や「私」、また「東京へ、貴方、いつ立ちますか」の中の「東京へ」や「貴方」について、「題目であつて平説ではない。こういふ題目を単説の題目といふ。題目には分説合説単説の三種が有る。分ける意味も合せる意味もない題目は単説である。」（松下大三郎（1930a : 338））と説明している。松下があげる例文を整理すると次のようになる。

題目	分説	あの人は幹事です / 御飯は食べますか
	合説	あの人も幹事です / 御飯も食べますか
	単説	あの人の幹事です / 御飯の食べますか <sup>16)</sup>
平説	あの人が幹事です / 御飯を食べますか	

13) 「はだか格」は、本来名詞的なものが助詞を伴わず副詞的に使われているものを広く指し、「明日来る」「五個買った」「直接言う」なども含む。ただし、鈴木重幸(1972:220)は、本稿で言う《ゼロ助詞》の用法に関して、「会話文などで、主語や対象語としてもちいられる。このばあい、「ーは」「ーが」の形の主語、「ーを」の形の対象語の文体論的な変種としてのニュアンスをもつ」（下線は引用者）と述べており、本稿で言う《ゼロ助詞》という問題は考慮されていない。その他については、詳しくは、丹羽（1987）などを参照。

14) 「不定格」は「は」「も」と《ゼロ助詞》を含むもので、本稿での《ゼロ助詞》と全く同じではない。

15) これ以外にも、「徒（ただ）」（本居宜長『詞玉緒』1779）、「離隔文主」（草野清民「大槻氏の広日本文学を讀みて所見を陳ぶ」1897）などがある。丹羽（1987）を参照。

16) 松下大三郎の表記法は「あの人の幹事です」「御飯、食べますか」のように読点によるもの。φは加藤による表記法。

さらに松下(1928, 1930<sup>b</sup>: 713)は、「分説は事情の異なるものと分けて云ひ、合説は事情の同じものと合せて言ひ、単説は分合せずにいふ」(ママ)と述べ、さらに以下のように、分説・合説・単説の区別は、動詞の接続形式にもあてはまるとする。

「-ば」……………分説 花咲かば / 花咲けば  
 「-とも」「-ども」…合説 花咲くとも / 花咲けども  
 「-と」「-ど」……………単説 花咲くと / 花咲けど

さきの「東京へ、貴方、いつ立ちますか」の「東京へ」が単説だというのはやや分かりにくい。松下の言う単説は、題目語になっているもののうち、「は」による分説や「も」による合説の作用のないものという定義なので、「東京へ」も単説なのである。「東京へは」なら分説、「東京へも」なら合説ということになる。本稿で言う《ゼロ助詞》は、「東京へ」のような形式は含まない。あくまで名詞に助詞が全くない形式のうち、その語が語彙機能として副詞的用法を持たないものを意味する。

この松下の分類を承けて、例えば、石神照雄(1989)などは、「零形式」<sup>17)</sup>も「主題-解説関係」をつくるものだ<sup>18)</sup>とするが、松下自身は、平説における格助詞の省略と単説の区別は「しかし、「が」「を」が無くて平説な場合もあるから、一概には言へない」(松下(1930a: 339))として、それ以上の考察を加えてはいない。この点は、無助詞でも題目になっていれば単説であり、題目になっていなければ平説という分類だと見ることができる。主題化と《ゼロ助詞》の関係はあとで議論する。

また、ここで注目しておきたいのは、松下が、「単説」を「分説」や「合説」と同じ部類に入れていることである。「は」や「も」は、いわゆるとりたて詞と呼ばれるものに含まれる。伝統的な品詞論では、副助詞と分類されることになる<sup>19)</sup>。本稿では最終的に、《ゼロ助詞》を「は」や「も」と並ぶ副助詞の一種と見なすことになる。この分類を厳密に押し進めると、《ゼロ副助詞》のほうが名称として妥当であるとする意見もある(角田太作氏私信)が、本稿では、当面、《ゼロ助詞》の名称を用いる。《ゼロ助詞》を「は・も」の同類と見るという点では、本稿は松下と見解を同じくしている。

### 3. 4. 筒井通雄(1983)

筒井(1983)は、『「ハ」の省略』というタイトルが示すとおり、「ハ」の省略可能な条件に関

17) 石神(1989: 340)参照。「零形式」とは本稿で《ゼロ助詞》と呼ぶものに近いが、異なる点も多いように思われる。石神(ibid.)の議論の仕方からすれば、松下の「単説」に相当するものと理解した方がよいようだ。

18) 石神(ibid.: 340)は、単説は格助詞の省略とは異なるもので、「成分の主題化」を果たす零形式の助詞だと断じている。しかし、石神(ibid.)は、仮説は提示するが、その立証が欠落しており、これだけでは到底説得力がない。

19) 尾上圭介のように、「は」を「係助詞」とする研究者も少なくない。

する仮説を提出したものである。筒井 (ibid.) は、特に、《ゼロ助詞》と単なる省略を区別してはいないが、議論の対象は、無助詞でなければならない場合と無助詞ではいけない場合の比較検討であるから、結局、本稿で言う《ゼロ助詞》が主たる検討対象になっていると読むことができる。

筒井の提出するルールは以下のようなものである<sup>20)</sup>。

一般に、X を「ハ」がマークしうる文要素とすれば、

(A) 「X ハ」が以下の (1) (2) (3) のいずれかの条件を満たす場合、「ハ」の省略は極めて不自然となる。

- (1) 「X ハ」が焦点である時。
- (2) 「X ハ」の対応部分が省略された時。
- (3) 「X ハ」の対応部分が強調される時。

(B) 「X ハ」が (A) の (1), (2), (3) のいずれをも満たさない場合は (この場合「X ハ」は前提 (又はその一部) をなしているが)、発話時において話者が「X ハ」を含む命題を前提にする程度が高い時、「ハ」の省略が自然となる。

筒井は、「ハ」の対照と提題の機能のうち、前者であれば、「X ハ」が焦点となるとし、その場合は《ゼロ助詞》は不可とした。これが、(A)の(1)の条件である。

5a) 僕は行くけど山田は行かないよ。

5b) \*僕 $\phi$ 行くけど、山田君 $\phi$ 行かないよ。

しかし、対照性のない「は」では省略可能である。

6a) 僕は行くよ。

6b) 僕 $\phi$ 行くよ。

また、以下のような例文で《ゼロ助詞》が不可である条件が、(A)の(2)である。なお、(7b) (8b) の発話意図は、それぞれ (7a) (8a) である。

7a) 太郎は？

7b) \*太郎 $\phi$ ？

8a) これは？

8b) \*これ $\phi$ ？

対応部分が省略されるとは、「X は？」の形を取り、続く述部がない場合のことである。

次に、(A)の(3)の例文としては次のようなものが挙げられている。

20) 筒井通雄 (1983 : 113)。縦書きを横書きで引用するため、一部表記法など改めたところがある。また、以下の筒井 (1983) の例文の引用は、筒井が「僕ハ [\* $\phi$ ] 行くけど、山田ハ [\* $\phi$ ] 行かないよ。」と表記しているものを本稿の他の例文の示し方に合わせて変更した。

9) それは嘘だ!

10a) A 「失礼ですが、鈴木さんですか？」 B 「いいえ、私は山田です」

10b) A 「失礼ですが、鈴木さんですか？」 B \* 「いいえ、私 $\phi$ 山田です」

(A)の(2)は、文の構造あるいは形態に関わる条件で、筒井 (ibid.) の指摘に問題はないと思われる。しかし、(A)の(1) (3)は検討の余地がある。たとえば、(6a) と (6b) は、文意味あるいは発話意味が同一だろうか。意味が違うと考えるべきなのではないか。この点は、あとで詳しく論じる。

筒井の提出する(B)の条件の『発話時において話者が「X ハ」を含む命題を前提にする程度が高い』という記述は、やや抽象的な言い方である。このことは、筒井自身が認めており、「決定的な答えは見当たらない」としている。ただし、仮説として、『話者が X について、それが発話時において話者及び聴者に心理的に近いと感じるとき、「X ハ」を含む命題を前提にする程度は高くなり、逆に、遠いと感じる時は、前提の程度は低くなる』という規則を提案している。「心理的な近さ」というのも、あまり明確な定義ではないが、検討する余地はあるだろう。後章で議論する。

### 3. 5. 尾上圭介 (1987)

本稿で《ゼロ助詞》と呼ぶ現象を取り上げた研究としては、尾上圭介 (1987)<sup>21)</sup> を挙げなければならぬ。甲斐ますみ (1992)、大場美穂子 (1994) など、尾上 (ibid.) を出発点にした、その後の研究がいくつかあるほか、ほかの研究論文なども尾上 (ibid.) には触れている。尾上の議論は、「ハもガも使えない文」という発表題からも窺えるように、はさみが全く話題になっていない状況ではさみを借りようと思っても、「\*はさみはある？」とも「\*はさみがある？」とも言えず、「はさみ $\phi$ ある」と言わねばならないという現象を説明することが出発点になっている。本稿では、本来、格助詞によってしかるべき格表示が行われてしかるべき場所に、助詞が置かれないことで生じる現象全般に対する関心なので、やや関心の発生の仕方は異なっている。従って、本稿で言う《ゼロ助詞》は、尾上 (ibid.) の言う「ハもガも使えない文」における無助詞を含む、さらに広い意味で用いていることに注意したい。

尾上 (ibid.) は、まず、「は」についてその基本的な文法特性を、2つ設定する。

「ハ」の 文法特性	「ハ」はその係り受ける範囲全体を意欲的に対象として働く
	「ハ」の意味的な個性は分説性である

21) 尾上圭介 (1987) は、国語学界での発表であるが、筆者が参観したのは、発表時に配布されたレジユメのみである。尾上 (1996) も、同趣旨のハンドアウトである。

22) 尾上 (1987) では、「文法的、意味的性格 (Grammatical Properties)」という表現になっている。本稿では、これを「文法特性」と略記する。

さらに、この文法特性により、2つの談話効果<sup>20)</sup>が得られるとする。

「ハ」の談話効果	(1) 対 比	(2) 題目提示
----------	---------	----------

さらに「ガ」についても、「はさみがある？」という文を例に、その談話効果を五項目にわたってあげている。

「ガ」の 談話効果	(1) 好都合・不都合の気持ち	(2) 「はさみがある」という前提のもとではさみがあることを確認する
	(3) 「はさみさえあればうまくいくのだが、そのはさみはあるか」という気持ち	(4) 反語 (5) 問い返し

そして、「ハもガも使えない文」とは、「ハ」の談話効果も「ガ」の談話効果も出では困るといふ場合の表現形式として無助詞の形式が選択される、というのが尾上（1987）の主張の骨子である。さらに、尾上（ibid.）は、「主語にハもガも使えない文」を、《存在の質問文の類》《教え・勧め・同意要求・質問・感嘆の類》《内容が話し手が聞き手のことに確定している文》の三種類に類型化している。

そして、例えば、「さっき降っていた『雨』（意識の中で、すでにいわば存在を承認された『雨』）が今も「降っている」か否かを問う場合には、『雨は降ってる？』という形でいいのである」（尾上（1987：5））が、降る以前に「雨」という現象が措定されることはあり得ないので、「雨は」という形が使えず、「雨 $\phi$ 降ってる？」となる、とそれぞれタイプごとに説明が与えられる。

最後に、この現象の分析によって示唆されることがまとめとして三点にわたって概括してあるが、ここではその二番目の項目に注目したい。曰く、「助詞を格関係のマーカ―という視点だけでとらえたり、直前の項目に対する働きという視点だけでとらえることは、文法と意味の関係のあり方を論ずるおもしろさととむずかしさをあまりにも簡単に捨ててしまうことになる、ということである。確かに、文の形式や述語の性質を考慮せずに、機械的に格関係を処理していく方法論を用いる研究もあるが、それだけでは十分に説明されないことが多々残るのである。

### 3. 6. 丹羽哲也（1989）

丹羽（1989）は、無助詞を主題性と語順という観点から分析したものである。丹羽は、無助詞の形態を主題性の高いものと低いものという対比で捉え、後者は単なる格助詞の省略と見ている。

この論文の主張の主眼は、「『名詞 $\phi$ 』は、それが焦点の位置にあるのでなければ、その名詞の既知性が高いほど、また、文頭に近い位置にあるほど主題性が高い」（丹羽（ibid.：54））という点にある。これは、逆に「名詞の既知性が低いほど、文中深い位置にあるほど主題性が低

い]ということになる。また、主題性が高ければ格助詞の種類に制限がないが、主題性が低い場合は、「が・を・へ」と「に」の一部についてしか無助詞が成立しないということも指摘されている。

11a) ねえ、あしたマイラってお客さんが来るんだって。

11b) ねえ、あしたマイラってお客さん $\phi$ 来るんだって。

12a) ねえ、マイラってお客さんがあした来るんだって。

12b) ? ねえ、マイラってお客さん $\phi$ あした来るんだって。

もしも、「マイラってお客さん」について以前に話したのでなければ、(12b)の《ゼロ助詞》は適格性が低い。つまり、「マイラってお客さん」は既知性が低い分主題性が低く、それが主題性が高くなければならない文頭に出ているため、その主題性を形成する要因の齟齬によって適格性が低下すると説明される。また、丹羽は、《ゼロ助詞》と述部の間に介在する要素が多ければ、適格性が低くなるが、これは《ゼロ助詞》の主題性が低い場合は格関係が明確でなければならないという制約があるからだとしている(丹羽(ibid.: 49))。確かに《ゼロ助詞》は格関係を明示しない。丹羽は、格関係の明確さは、日常的に予想しやすいものでなければならないともしているが、《ゼロ助詞》のついた名詞句と述部の間に別の要素があればあるほど格関係が分かりにくくなるという単純な関係が成立するかというと、これは検討の余地がかなりありそうである。

### 3. 7. 甲斐ますみ(1991, 1992)

甲斐(1992)は、尾上(1987)の批判的検討を、談話の流れや情報量の違いといった観点から行ったものである。まず、一つ目の問題提起は、丁寧さによって《ゼロ助詞》の出現に差があるということである。

13a) \*ねえ、はさみはある?

13b) \*ねえ、はさみがある?

13c) ねえ、はさみ $\phi$ ある?

14a) すみませんけれども、はさみはありませんでしょうか?

14b) \*すみませんけれども、はさみがありませんでしょうか?

14c) すみませんけれども、はさみ $\phi$ ありませんでしょうか?

同じ場面と言う場合でも、(14)のように丁寧な言い方にすると「は」があるほうがむしろ自然なくらいである。大場(1994)は、この点について、否定文では「は」の用い方が異なるので、問題にならないとしているが、否定文でなくても同じことが起こる。

15a) すみませんけれども、はさみはありますでしょうか?

15b) \*すみませんけれども、はさみはありますでしょうか?

15c) すみませんけれども、はさみφありますでしょうか？

特に(15)と(14)でも問題の所在は変わらない。これは、丁寧さの問題だけで論じるべきではないが、考察する余地は十分にあるであろう。

二つ目の問題提起は、尾上(1987)で談話上初出の主語に新たな評価を与える文で使うとされた《ゼロ助詞》が実は談話上初出でない場合があるという批判である。この点を視野に入れて、甲斐は《ゼロ助詞》は、話者の情報と聞き手の情報が関連性を有しており、話者の持ち出した談話のトピックが聞き手の情報の中に記録されているか、もしくは記録されやすい場合に用いられるとまとめている(甲斐(1992:102))。これは、話者と聞き手の間で談話主題の共有度が実際に高いか、あるいは潜在的に高い(つまり、共有が容易である)場合に《ゼロ助詞》が使われる、と読むことができるであろう。

また、甲斐(1991)では、「は」が省略されやすい条件として、①三人称の方が一人称・二人称より省略しやすい、②聞き手に対する配慮があれば省略しやすい、ということを挙げ、逆に「は」が省略しにくくなる要因として、話者が真と確信する事柄を強く主張する場合を挙げている。話者が真と思うことを強く言うのは、聞き手に対する配慮と表裏の関係になっていると見ることができる。

### 3. 8. 大場美穂子(1994)

大場(1994)は、尾上(1987)を出発点にし、甲斐(1992)を検証しながら、「は」も「が」も使えない文を分析している。大場は、文を三種類のタイプに分け、それぞれで《ゼロ助詞》が出現する場合を考察している。3つのタイプとは、題述文・描写文・人称制限のある文であり、それをもとに《ゼロ助詞》の出現する文が以下の三対応に分類される。

《タイプ1》話し手の意図は描写文であるが、内容が題述文に近づいているもの

《タイプ2》話し手の意図としては題述文であるが、内容が描写文に近づいているもの

《タイプ3》文の主体に人称制限があり、その主体を取って表示するもの

16a) この花はきれいだね。

16b) この花がきれいだね。

16c) この花φきれいだね。

たとえば、(16)のように「この花」と指示詞付きで固定されている主部に「は」がつくと題述構造のある文と解釈される。「が」がつくと「この花」が焦点となってしまう。つまり、話し手が題述構造に解釈されたくない(すなわち、描写文として解釈してほしい)場合に、「は」も「が」もつけられなくなり、《ゼロ助詞》が生じる。これが、《タイプ1》の例である。この逆が《タイプ2》であるが、例として挙げられているものは、たとえば、次のようなものである(大場(1994:20))。

17) (食堂の貼り紙) 冷たいビールφあります。

これは、話し手の意図としては、ビールの存在を描写する文として解釈してほしいのではなく、「ビール」という主題に関してその存在を題述構造で伝えたいのであるが、新出の名詞の「冷たいビール」に「は」をつけると対照と解釈されてしまう(たとえば、「冷たいビールはあるが、冷酒は置いてない」)。かといって、描写文に解釈されたくはないから「が」もつけず、結局、無助詞になる。

《タイプ3》は、「私φ転職したい」のような文で、「…したい」という希望を表す場合、人称は一人称であり、二・三人称では使わないので表示する必要がない。それを敢えて一人称で表示しようとする《ゼロ助詞》にせざるを得ない。「私が転職したい」では「私」が焦点になる。「私は転職したい」となると、対照(たとえば、「君はこの仕事、ずっとやるの? 私は転職したい」と解釈されるか、題述構造の文では既出の「私」がトピックであることが明らかでない)と不自然になる。このほかに主体が二人称に限定される場合(命令文など)も扱われている。

大場(1994)の分類は、決して《ゼロ助詞》を網羅的に論じているのではないが、興味深い指摘を含んでいる。ただ、《タイプ1》《タイプ2》で、題述文と描写文という二項対置にとらわれてすぎている嫌いがある。前者は「発話意図が描写文であるのにガ格が不適切なもの」、後者は「発話意図は題述文なのにハを使うと対照と解釈されてしまうもの」でいいのではなかろうか。描写文でなければ題述文に近づき、題述文でなければ描写文に近づくと原則は分かりにくい。あるいは、こういった分類の軸を導入するためには、本来文はすべて描写か題述のいずれかの機能を持つとして分類できるということを実証した上で、提示すべき分類案であろう。とすれば、第三のタイプがあることが自家撞着であると考えざるを得ない。

また、題述文の定義は難しい。というのは、たとえば、「この花φきれいだね」のような文では、丹羽(1989)の立場からすれば「この花」は主題ということになり、すなわち、これは描写文ではなく、題述文に含められてしまうと思われるからだ。本稿は、大場(ibid.)の言う発話意図が重要だと考える。また、題述・描写という文意味の次元と、発話意図という発話意味の次元とは異なるものであり<sup>24)</sup>、混同せずに考察していく必要がある。

### 3. 9. 丸山直子(1995, 1996a, 1996b)

丸山(1995)は、無助詞になっている成分がじっさいどういう格に立っているかを、書き起こした対話のデータを用いて調査を行ったものであり、丸山(1996a)と丸山(1996b)はその調査結果をもとに無助詞の格成分についてやや概括的にまとめたものである。丸山(1996b)な

24) 文意味(sentence meaning)と発話意味(utterance meaning)の違いについては、Blakemore(1992)あるいは加藤重広(1996)を参照されたい。

どを中心に、結果を単純化してまとめると、以下のことが言える。

- <1> 無助詞の格成分は、ガ・ヲ・ニが殆どを占める。
- <2> 直後の動詞に係る場合はヲが多い。
- <3> 動詞との間に他の要素が介在する場合は、ガが多い。
- <4> 無助詞成分は文頭に近いと主題性を帯びてくる。主題性の高いものでは格の認定が難しいものがある。

このほか、丸山の調査から分かることは、ニでは到達点（この用法では「へ」も多い）・対象・存在の場所や範囲などの用法で無助詞が見られると言うことである。また、丸山は調査の結果を踏まえて、無助詞は、「単なる格助詞の省略」であるかあるいは「取り出し」であるとしている。「取り出し」とは、係助詞のハがあらかじめ対象を指定しているのに対し、無助詞では発話の時点で指定する（丸山はこれを「取り出し」と呼んでいる）ことを指している。ただし、丸山自身も認めているように、「取り出し」の要因としては様々な要素が考えられ、さらに考察する余地がある。また、「取り出し」と「単なる各助詞の省略」をどう区別するのは明示されていない。丸山は先行研究を中心に5項目にわたって《ゼロ助詞》を考察すべき観点をあげているが、その多くは本稿でも言及したもので特に触れるには及ばないであろう。ただ、これまで文法論として論じられてきた《ゼロ助詞》の問題について、その音声面の特徴（ポーズ・スピード・アクセント）も考察しなければならないということは、丸山（1996b）でも指摘されているが、重要なことだと言える。

### 3. 10. 大谷博美（1995a）

大谷（1995a）は、「ハもヲも使えない文」について考察したものである。また、大谷（1995b）は、「ハもガも使えない文」に関する考察であるが、本稿の関心と重なる部分の多い前者をここでは取り上げる。大谷（1995a）の考察の主眼は、「ハもヲも使えない文は、①発見の状況に置いてヲ格名詞句が旧情報である場合、②ダイクシスを伴うヲ格名詞句を突如として聞き手に提示する場合、③談話の初期値が確認されていないうちに共有知識を疑問文の主題として対話の中で聞き手に提示する場合、に生じる」という主張であろう。

①については、本論の主張する《ゼロ助詞》の脱焦点化機能でも説明がつく。従って、あとで取り上げることにし、ここではまず②を取り上げる。②の例として大谷（ibid.）があげているのは、次のような例<sup>25)</sup>である。

17) まるこ：はまじー

はまじ：なんだよー

まるこ：これ {φ} / ?ヲ / \*ハ { } あげる。南の島のおみやげ。

25) 大谷（ibid. : 64）。「ちびまるこちゃん」からの採例。文法性の判断は、大谷（ibid.）のまま。

たしかに、この例では、初出のダイクシスを伴う名詞句、すなわち「これ」があり、「を」がつくと不自然である。しかし、反証はすぐ見つかる。

18a) 【近所にいただきもののリンゴをおすそ分けに行く】

「実は、青森の親戚から、リンゴをたくさんもらいまして…。よろしかったら、このリンゴ $\phi$ 食べてください」

18b) 【近所にいただきもののリンゴをおすそ分けに行く】

\*「実は、青森の親戚から、リンゴをたくさんもらいまして…。よろしかったら、このリンゴを食べてください」

(18b)の「このリンゴ」は、ダイクシスを伴う名詞句ではあるが、初出ではない。しかし、「を」の不自然さは変わらない。

19a) 【帰宅して、テーブルの上の柿(1つ)を見つける。台所の母親に向かって】

「あ、柿があるじゃない。ねえ、この柿 $\phi$ 食べていい？」

19b) 【帰宅して、テーブルの上の柿(1つ)を見つける。台所の母親に向かって】

\*「あ、柿があるじゃない。ねえ、この柿を食べていい？」

20a) 【母親に先日買った柿がまだあるか尋ねると、母親が「冷蔵庫にあるわよ」と言う。そこで、尋ねる】

「じゃあ、それ $\phi$ 食べていい？」

20b) 【母親に先日買った柿がまだあるか尋ねると、母親が「冷蔵庫にあるわよ」と言う。そこで、尋ねる】

???「じゃあ、それを食べていい？」

(19)の「この柿」はダイクシスがついているが初出でも、急に提示したものでもない。また、(20)の「それ」は前方照応の代名詞でダイクシスではないし、また、初出というわけでもない。しかし、これらは《ゼロ助詞》が適切で、「を」は不自然である。

21a) 【大道芸人が急に大きな剣を取り出しつつ、見物人に話しかける】

???「みなさん、私は今からこの剣 $\phi$ 飲んでご覧に入れます」

21b) 【大道芸人が急に大きな剣を取り出しつつ、見物人に話しかける】

「みなさん、私は今からこの剣を飲んでご覧に入れます」

また、(21)では、大谷(ibid.)の言う「ダイクシスを伴うヲ格名詞句を突如として聞き手に提示する場合」でありながら、「を」がある方が至極自然で、《ゼロ助詞》のほうが不自然である。大谷(ibid.)の、この分析は成立しないことが明かである。

次に③の「談話の初期値が確認されていないうちに共有知識を疑問文の主題として対話の中で聞き手に提示する場合」を見る。この場合に「は」が不適である理由は、大谷(ibid.)の記述でいいと思うが、これを「を」を不自然とする理由とすると納得しがたいものがある。大谷

のあげた次の例文<sup>26)</sup>では、確かに、《ゼロ助詞》のみが可能で、「を」や「は」は不可能である。

22) 真人：おはよオみゆきちゃん。

みゆき：おはよ。

真人：昨日の江川 {φ / \*を / \*は}, 見た? すごかったねえ。三振 16。

ここではこの日初めて顔を合わせた状況で、談話の初期値が確認されていない。しかし、次の例ではどうだろうか。

23a) 【その日の朝一番に顔を合わせる。「おはよう」という真人にみゆきが「おはよう」という。そのあと、真人が言う】

真人「みゆきちゃんさ、昨日、大通りを帰った?」

23b) 【その日の朝一番に顔を合わせる。「おはよう」という真人にみゆきが「おはよう」という。そのあと、真人が言う】

真人「みゆきちゃんさ、昨日、大通りφ帰った?」

同じく、談話の初期値の確認はない。しかし、疑問文の主題である「大通り」は《ゼロ助詞》も可能だが、「を」がついても不適切ではない。③に関しても、大谷（1995a）の規則化は不十分なところがある。この点は、①・②の場合とあわせて、あとで再び検討することにする。

### 3. 11. その他の先行研究

このほかに、長谷川ユリ（1993）では、《ゼロ助詞》には信号性の機能（聞き手の注意を喚起する）とやわらげの機能があるとしている。やわらげに近い指摘は、藤原雅憲（1992）にもある。また景山太郎（1993：56）では非対格自動詞では主語のガが省略しやすいが、非能格自動詞では主語のガが省略しにくいという指摘をしている。ただし、これは例文によっては、反証も多く見つかる。

24) テレビで中核派φデモするの見たヨ。

25) 教え子φ活躍するのを見るのは楽しい

これらは、いずれも景山（ibid.）が非文としてあげているものである。確かに、このままでは自然とは言えない。しかし、以下で考察するが、従属節では無助詞にしにくいという一般的な傾向があることを忘れてはいけない。（24）（25）は従属節の《ゼロ助詞》なのである。これらが非文であるのは、「デモする」「活躍する」といった非能格自動詞の問題というより、従属節であることが大きいのではないか。現に用いられている非能格自動詞はそのままに、従属節にならないように例文を案出すると、実はそれほど不自然ではないのである。

26) 数寄屋橋のあたりで、中核派φデモしてたよ。

27) 先生の教え子φ活躍してますよねえ。今年の学会でも何人も発表してますよねえ。

26) 大谷（1995a：65）。漫画「みゆき」よりの採例。ただし、（23）は加藤の作例。

これは、非能格自動詞と非対格自動詞の仮説を否定するものではないが、助詞の脱落とこの仮説を結びつけるにはもっと明確で強固な証拠が必要である。景山（1993）の記述では不十分である。

なお、項目ごとに列挙する形式をとった手際のよい先行研究のまとめが丸山（1996b）にある<sup>27)</sup>。

### 3. 12. 《ゼロ助詞》の定義

本稿の関心を寄せる《ゼロ助詞》は、もとの助詞（格助詞の他に副助詞<sup>28)</sup>も含む）を復元して挿入したときに、その文意味か発話意味において有意の差が生じるものである。これは、同じ文脈や場面で《ゼロ助詞》の発話か助詞のある発話のいずれか一方が不適格になったり、不自然になることで、かなりの程度まで判定可能である。しかし、これが、ニュアンスの差や文体差にとどまるものもある。助詞があつて然るべき位置に助詞を欠くことを、2種類に分けることは、大場（1994）や丸山（1996a, 1996b）など例がないわけではない。名称は違うが、大場（ibid.）や丸山（ibid.）の二項対置を理想化すると、次の表のようになるだろう。

無助詞	助詞の省略	助詞を補っても、意味上有意の差を生じない →助詞の省略が非文法的となる場合は、発話の適切性以前に、その文そのものが文法的に不適格である
	ゼロ助詞	助詞を補うと意味上有意の差を生じる →《ゼロ助詞》の文が非文になる場合は、その文自体が不適格なのではなく、発話上適切でないという理由による

しかし、本稿は、この二項対置の理論装置を用いない。以下、本来あるべき助詞が欠落している無助詞はすべて《ゼロ助詞》として扱うことにする。つまり、本稿では助詞が省略されているという見方を便宜上いっさい排除することにした。理由は簡単である。両者を区別する科学的根拠が見あたらないからである。

上の表で言う《ゼロ助詞》は、格助詞などがなくことによってある種の機能が生じているということであり、そこには無音形の（すなわちゼロ形態の）助詞が存在していると見なすことができるものである。その対局にあるのが、《助詞の省略》であり、助詞はあってもなくても変わらないという評価を受ける。しかし、上の表のように「意味上有意の差が生じ」るかどうかという点で区分するのは容易ではない。判断するのは論者の言語直観のみである。そもそも

27) ただし、尾上（1987）・大場（1994）と、当然のことながら丸山（1995）などはそこでは触れられていない。

28) この場合の副助詞とは実質的に「は」のみであり、「も」などは含まれない。

「有意の差」とは何かという問題もある。ここで《助詞の省略》と判定されるような例でも、助詞の有無に文体やニュアンスなども含めて全く影響を受けずにすむということはない。実のところ、両者の間に峻然と線を引けるという保証はないのである。よって、本稿は二分して考察することをせず、形態に関して確実に判定できるところから出発することにした。つまり、本稿では、上の表の無助詞の全体を指して、《ゼロ助詞》と呼ぶことにする。以下、 $\phi$ の記号で《ゼロ助詞》を表す。また、談話における場面・状況を表すのに【 】を使う。同じ例文番号では、場面の条件は同じであるが、判断がぶれないように、ややくだしいが、文の前で繰り返すことにした。例文の変異は、a, b, c... とアルファベット小文字で表示した。

## 4. 格と無助詞

これまでの《ゼロ助詞》や助詞の省略の研究は、圧倒的に主格（ガ格）に集中している。松下大三郎があげているように、早くからヲ格でも無助詞が見られることは分かっていたが、それ以外の格（助詞）で見られる無助詞現象に関しては先行する研究もほとんどない。

本章では、個々の格助詞に関して無助詞のありようを見ていく。以下では、助詞を大まかな用法ごとに分類して観察することにするが、助詞の用法については、田窪・益岡（1992：74-83）のほか、鈴木（1972：204-243）などを参考にした。

### 4. 1. ガ格

格助詞の「が」の用法については、本稿では、主格と対格の二種類に分ける。主格には、いわゆる《総記の「が」》と《中立叙述の「が」》の双方が含まれる。

#### 4. 1. 1. 主格のガ格

まず主格で用いられた「が」から見ていくことにする。

28a) 【会話をしていて、話題を転換した後】「今朝、パソコンが壊れちゃってさあ」

28b) 【会話をしていて、話題を転換した後】「今朝、パソコン $\phi$ 壊れちゃってさあ」

29a) 【その日初めて会って】「どうした？ 元気ないね」「風邪が抜けなくてねえ」

29b) 【その日初めて会って】「どうした？ 元気ないね」「風邪 $\phi$ 抜けなくてねえ」

30a) 【ネクタイの曲がっている同僚に向かって】「おい、ネクタイが曲がってるぞ」

30b) 【ネクタイの曲がっている同僚に向かって】「おい、ネクタイ $\phi$ 曲がってるぞ」

これらは、「が」がなければ俗調という感じが強くなるが、(28a) (29a) (30a) と (28b) (29b) (30b) とで 大きな意味の差を必ずしも感じない。一般に、(28b) (29b) (30b) のような発話の無助詞の部分では、一拍分の空白ができたり、前の母音が一拍分程度長くなることが多

いようにも思われるが、これは必ず生じる現象ではない。音声面での代償が生じている可能性はあると思うが、本稿では、音声面の現象は扱わない。

以上のような例は、《ゼロ助詞》が積極的な機能を果たしているという感じはあまりしないが、本稿はこれを無意味なものとは考えない。(29a) などでは、「が」があることで、「例のあの風邪」という共有知識内の情報を指すことも可能だが、(29b) の《ゼロ助詞》ではそれは不可能である。(30b) などでは、現場での直示であるということも考慮する必要があるが、それについては次章で触れる。

31a) 【外から帰ってきたばかりの家族に向かって】

「ねえ、雨  $\phi$  降ってる？」

31b) 【外から帰ってきたばかりの家族に向かって】

\* 「ねえ、雨が降ってる？」

32a) 【数人でコンパについて話している。「加藤」の話題は全く出ていない。そこで思い出して言う】

「そうそう、加藤君  $\phi$  来ないよ」

32b) 【数人でコンパについて話している。「加藤」の話題は全く出ていない。そこで思い出して言う】

\* 「そうそう、加藤君が来ないよ」

33a) 【図書館である本を探しているが、なかなか見つからない。そこでひとりごとを言う】

「あの本  $\phi$  どっかにあったんだけどなあ」

33b) 【図書館である本を探しているが、なかなか見つからない。そこでひとりごとを言う】

\* 「あの本がどっかにあったんだけどなあ」

これらは、同じ状況で、「が」のある発話が不適切になる。(31a) (32a) (33a) は、《ゼロ助詞》がある種の機能を果たしていると言える。ちなみに、これらは「が」の代わりに「は」を用いても不適切であることは変わりがない。(31) (32) (33) は、「が」が非文になり、《ゼロ助詞》を使えば適格になる例であるが、逆のケースでも《ゼロ助詞》による違いができることは確認できる。

34a) 【会議に必要なメンバーが揃わない。誰の責任かについて話している】

「山下が悪いんだよ。ちゃんと連絡してないんだから」

34b) 【会議に必要なメンバーが揃わない。誰の責任かについて話している】

\* 「山下  $\phi$  悪いんだよ。ちゃんと連絡してないんだから」

(34) では、《ゼロ助詞》が非文で、「が」のみ適格となる。この「が」は、いわゆる《総記の「が」》であり、この用法をどう分類するかは諸説あるが、いずれにせよ、省略すると不適切もしくは不自然である。

34a) 【漫才師が自己紹介をしている】

「早稲田と立教の学生でコンビをくみまして、早稲田が僕で、立教がこいつです」

34b) 【漫才師が自己紹介をしている】

\* 「早稲田と立教の学生でコンビをくみまして、早稲田 $\phi$ 僕で、立教 $\phi$ こいつです」

35a) 【洋服を選んでいるときに助言する】

「ほかのはどれも似合わないよ。それがいいよ。」

35b) 【洋服を選んでいるときに助言する】

??? 「ほかのはどれも似合わないよ。それ $\phi$ いいよ」

また、(35) では、《総記の「が」》を用いたのが(35a)で、「他のはいずれもだめで、今手に持っているその服だけが似合う」という趣旨になる。(35b)は、本来「それだけが」という総記の意味になるべきところに《ゼロ助詞》が出ていて、総記の意味にならない。よって、ひどく不自然である。

しかし、これまで見てきたように両者の差異について明確な判断が下せる例ばかりではない。

36a) 【宴会をしている。そこで山田が席を外していることに気づく。隣の席の友人に言う】

「山田君 $\phi$ いないね」

36b) 【宴会をしている。そこで山田が席を外していることに気づく。隣の席の友人に言う】

「山田君がいないね」

たとえば、(36)は発話としてはいずれもあり得る。しかし、(36a)と(36b)の意味は同じではない。(36a)は、「山田君はどうしているかと思ってみたら、いないじゃないか」という意味であり、(36b)は「何か様子が変わったと思って(あるいは誰かいないなと思って)、よく考えてみたら、誰だろう、山田君がいないじゃないか(あるいは、いないのは山田君じゃないか)」という意味である。前者が有題文、後者が無題文に対応する。この2つの有助詞文と無助詞文の違いは、後で提出する脱焦点化の仮説で説明ができるのだが、同じ文脈や場面で両者がともに成立することが少なくないだけに判断は難しい。

#### 4. 1. 2. 対格のガ格

次に対格の「が」を見る。

37a) 【背伸びをしてフェンスの向こう側を見ようとしている友達に向かって】

\* 「向こう側が見える？」

37b) 【背伸びをしてフェンスの向こう側を見ようとしている友達に向かって】

「向こう側 $\phi$ 見える？」

38a) 【外国製の接着剤の説明書を見ていて、友人に向かって尋ねる】

\* 「英語が読める？」

38b) 【外国製の接着剤の説明書を見ていて、友人に向かって尋ねる】

「英語  $\phi$  読める？」

39a) 【知人宅を訪れたとき、好物のチーズケーキを勧められて】

\* 「チーズケーキが大好きなんですよ」

39b) 【知人宅を訪れたとき、好物のチーズケーキを勧められて】

「チーズケーキ  $\phi$  大好きなんですよ」

(37) (38) (39)はいずれも、「が」は使えず、《ゼロ助詞》でなければならない例である。むしろ、その逆もある。

40a) 【水を頼んだのに、コーラを出されて】

「水が飲みたいんだよ」

40b) 【水を頼んだのに、コーラを出されて】

??? 「水  $\phi$  飲みたいんだよ」

41a) 【会議。プロジェクトの進行が人手不足で遅れている件について相談している】

「それじゃ、締め切りを延ばしてもらおうか」

「時間の問題じゃないんだよ。人手が必要なんだ」

41b) 【会議。プロジェクトの進行が人手不足で遅れている件について相談している】

「それじゃ、締め切りを延ばしてもらおうか」

\* 「時間の問題じゃないんだよ。人手  $\phi$  必要なんだ」

これらは対格ではあるが、実は主格の場合と同様に、総記の解釈を受ける「が」と見ることができる。いずれも、「コーラではなくて、水が飲みたい」あるいは「時間ではなくて、ほかならぬ人手が必要である」という趣旨だからである。

42a) 【プロジェクトが人手不足で進んでいないことを聞いた同僚が言う】

「手伝おうか？ 人手が足りないんだろ？」

42b) 【プロジェクトが人手不足で進んでいないことを聞いた同僚が言う】

「手伝おうか？ 人手  $\phi$  足りないんだろ？」

これは、「が」があってもなくても成立する。しかし、「が」があると、その部分が強調され、総記的解釈が成り立ちやすくなる。つまり、(42a)であれば「なにが足りないって、足りないのは人手なんだろ」という意味合いになるわけである。また、たとえば、「そうそう、池田君はテニスがうまくてさ」といった発話も「が」を《ゼロ助詞》でだいたいすることが可能だが、「が」があると「池田君はなにがうまいってテニスがうまいんだ」あるいは「池田君がうまいのはテニスなんだ」といった総記的解釈が成り立つ。こういった解釈は《ゼロ助詞》を使うと出てこなくなる。しかし、「が」が総記的な解釈以外を排除するわけではないので、両者の違いがあまり表立たないということはある。場合によっては、大きな意味上の差を感じない人がいて

もおかしくはない。そして、やはり、この種の微妙な例はいくらでも見つかる。

43a) 【母親が、疲れた様子の子どもに尋ねる】 「水が飲みたいの？」

43b) 【母親が、疲れた様子の子どもに尋ねる】 「水 $\phi$ 飲みたいの？」

(43a) は、「のどが渴いているんでしょう。飲みたいものは、水なの？」という総記的な解釈をするのであれば<sup>29)</sup>、格助詞のない (43b) とは意味がやはり明らかにずれている。もしも、(43a) を総記として解釈しなければ、大きな差がなくなる。

#### 4. 2. ヲ格

格助詞の「を」の用法は、本稿では、2つに分けることにする。対格と場所格である。場所格とは、一般に通過地点を表す「を」などと言われる用法をさすが、これは一般に移動動詞とともに用いられる。単純に両者を分けることに問題がないわけではないが、本稿の関心外なのでここでは扱わない<sup>30)</sup>。

##### 4. 2. 1. 対格のヲ格

まず、対格の「を」<sup>31)</sup>について検討する。

44a) 【帰宅したばかりの家族に向かって】

\* 「ねえ、貰い物だけど、バナナを食べる？」

44b) 【帰宅したばかりの家族に向かって】

「ねえ、貰い物だけど、バナナ $\phi$ 食べる？」

45a) 【教室で。友人の机の上にある本を指さして言う。本はその時点で初めて見た本】

\* 「その本をもう読んじゃったの？」

45b) 【教室で。友人の机の上にある本を指さして言う。本はその時点で初めて見た本】

29) 総記的な解釈をする場合、「水が」を強く言い、場合によっては「水が」と「飲みたいの？」の間にポーズが入るのが普通だと考えられる。総記的でない解釈であれば、ポーズはなく、特に「水が」が強くなることもないだろう。先に述べたように、本稿は音声面の実現での変異は扱わないが、考慮する必要がないわけではない。

30) 「その道を通る」「あの門をくぐる」「廊下を走る」など、場所格の「を」では他動性がきわめて低く、対象がその影響を実質的に被ることはほとんどない。これに対して、対格の「を」では、「人を殺す」から「人を見る」「人を愛する」など他動性の段階は様々である(角田太作(1991: 63-88)など参照)。他動性の判定は、動詞の意味特性によるが、「第三ゲートを突破する」のように、通過点を表す場所格の「を」と読めるものの、他動性が高いという例もあり、両者を分ける分水嶺を簡単に定めることはできない。このほか、杉本武(1986: 296-302)に言う状況補語(「嵐の中を飛行機は離陸した」などの用法)もあるが、本稿では扱わない。

31) 鈴木重幸(1972: 210)では、ここで対格と呼ぶ「を」の用法に、「働きかけを受ける対象」「作り出す対象」「やりとりする対象」「心が向かっていく対象」の4つを挙げている。

32) これは、「これを召しあがっていただくと思ってお持ちしたんですが」のように言えば、「を」があることが適切で、《ゼロ助詞》の方がむしろやや不自然になる。甲斐ますみ(1992)は、文体によって成り立たない場合があることを指摘しているが、本稿筆者はかならずしも文体の問題とは考えない。この点については、第5章で扱う。

「その本 $\phi$ もう読んじゃったの？」

46a) 【知人宅へ付け届けに行き、挨拶の後、言う】<sup>32)</sup>

\* 「どうぞ、これを召し上がってください」

46b) 【知人宅へ付け届けに行き、挨拶の後、言う】

「どうぞ、これ $\phi$ 召し上がってください」

これらは、《ゼロ助詞》でなければならない例である。(44) (45) (46) では、「を」があると不自然になる。「が」の場合と同様、《ゼロ助詞》の方が不適格になる用例もたやすく見つかる。

47a) 【チーズケーキとショートケーキが1つずつある。姉が妹に、「チーズケーキなら食べてもいい」と言う。しかし、妹は姉が見ていない間にショートケーキを食べ始める。それを見つけた姉が妹に怒って言う】

「チーズケーキを食べてって言ったでしょう」

47b) 【チーズケーキとショートケーキが1つずつある。姉が妹に、「チーズケーキなら食べてもいい」と言う。しかし、妹は姉が見ていない間にショートケーキを食べ始める。それを見つけた姉が妹に向かって言う】

??? 「チーズケーキ $\phi$ 食べてって言ったでしょう」

48a) 【「はさみある？」と聞いたところ、カッターを渡そうとする友人に】

「はさみを貸してよ」

48b) 【「はさみある？」と聞いたところ、カッターを渡そうとする友人に】

\* 「はさみ $\phi$ 貸してよ」(特に「はさみ」に強勢がない場合)

次にいずれも成立する例を見る。

49a) 【姉は本を読んでいる。テレビを見ていた妹が漫画を読み始める。姉が妹に言う】

「テレビを消してよ」

49b) 【姉は本を読んでいる。テレビを見ていた妹が漫画を読み始める。姉が妹に言う】

「テレビ $\phi$ 消してよ」

50a) 【口論をしている。友人に向かって】

「そんな話をしてるんじゃないだろ」

50b) 【口論をしている。友人に向かって】

「そんな話 $\phi$ してるんじゃないだろ」

51a) 【夫が部屋中をきょろきょろ見回している。「何か探してるの?」と聞く妻に夫が言う】

「うん、車のキーを探してるんだけど」

51b) 【夫が部屋中をきょろきょろ見回している。「何か探してるの?」と聞く妻に夫が言う】

「うん、車のキー $\phi$ 探してるんだけど」

これらはいずれも可能である。こういった話し言葉の文体では無助詞の方がより多用され(て、その結果より自然に感じ)ると思われるが、「を」があっても問題はないし、この文脈では両者ともに成立する<sup>33)</sup>。この意味の差は第5章で論じる。

#### 4. 2. 2. 場所格のヲ格

次に場所格<sup>34)</sup>を見ることにしよう。場所格の「を」では、《ゼロ助詞》でなければならない用例はあまり多くない。

52a) 【友人とバスに乗っている。途中で行き先の違うバスに乗ったことに気づき友人に言う】  
??? 「おい、このバスを降りよう」

52b) 【友人とバスに乗っている。途中で行き先の違うバスに乗ったことに気づき友人に言う】  
「おい、このバス $\phi$ 降りよう」

53a) 【発車したばかりの特急に乗っている。自分の席で、携帯電話で家族と話していて、  
「もう、電車は駅 $\phi$ 出たの？」<sup>35)</sup>と聞かれて、答える】

\* 「うん、駅を出た」

53b) 【発車したばかりの特急に乗っている。自分の席で、携帯電話で家族と話していて、「も  
う、電車は駅 $\phi$ 出たの？」と聞かれて、答える】

「うん、駅 $\phi$ 出た」

54a) 【職場の先輩との会話。たまたま弟の話題になる。先輩に「それで、弟さんは、まだ大  
学？」と聞かれて、答える】

??? 「いえ、大学を出ました」

54b) 【職場の先輩との会話。たまたま弟の話題になる。先輩に「それで、弟さんは、まだ大  
学？」と聞かれて、答える】

「いえ、大学 $\phi$ 出ました」

次に《ゼロ助詞》では不適切で「を」でなければならない例を見る。

55a) 【知人と車で東京の道路を走るときのことを話している。「永代通りを車で走ったことあ  
る？」と聞かれて、答える】

「車で永代通りを走ったことはないですね。自転車ならありますけどね」

55b) 【知人と車で東京の道路を走るときのことを話している。「永代通りを車で走ったことあ  
る？」と聞かれて、答える】

33) 発話のどこかに強勢を置いた言い方は考えず、強勢のない発話として判断する。

34) 「場所格」は、さらに①経路、②起点、③経由点などを表す用法に下位分類することが可能である。なお、奥津敬一郎(1967)、杉本武(1986)では、「場所格」ではなく、「移動格」と呼んでいる。

35) この質問は「電車は駅を出たの？」のように「を」があってもよい。「駅 $\phi$ 出た？」と聞かれると、\*「うん、駅を出た」は不可で、「うん、駅 $\phi$ 出た」でなければならない。「駅を出たの？」と聞かれた場合は、「うん、駅を出たよ」でも「うん、駅 $\phi$ 出たよ」でもどちらでもよい。

??? 「車で永代通り $\phi$ 走ったことはないですね。自転車ならありますけどね」

56a) 【駅のアナウンス】

「電車が参ります。白線を越えて前に出ないようにお気をつけください」

56b) 【駅のアナウンス】

\* 「電車が参ります。白線 $\phi$ 越えて前に出ないようにお気をつけください」

57a) 【友人と散歩している。歩きながら友人に話しかける】

「さっき通った道を歩くと、必ず子どもの頃遊んだ田舎の道を思い出すんだよね」

57b) 【友人と散歩している。歩きながら友人に話しかける】

\* 「さっき通った道 $\phi$ 歩くと、必ず子どもの頃遊んだ田舎の道を思い出すんだよね」

以上の例は、文体などの影響を受けやすく、《ゼロ助詞》でも多少表現を変えると不自然さが軽減されることがある。次の例は同じ場面で両者ともに成立する、微妙な例である。

58a) 【廊下を走っている生徒に先生が言う】

「こらー、廊下を走るな」

58b) 【廊下を走っている生徒に先生が言う】

「こらー、廊下 $\phi$ 走るな」

59a) 【目的地まで行くのにどの経路が早いかにについて友人にアドバイスする】

「途中から高速を降りて、一般道を行った方が早いよ」

59b) 【目的地まで行くのにどの経路が早いかにについて友人にアドバイスする】

「途中から高速 $\phi$ 降りて、一般道 $\phi$ 行った方が早いよ」

「を」を、対格と場所格に分けて見てきたが、この2つの用法間で《ゼロ助詞》と有助詞の分布の違いは特に見られない。ただし、全体的に見ると場所格のほうが微妙な例（一方が明らかに不適切・不自然とは判断しにくい例、両者とも成立する例）が多く観察される。

#### 4. 3. 二格

格助詞の「に」は用法による《ゼロ助詞》の分布の差がはっきりしているので、やや詳しく見ておく必要があるだろう。また、「に」の用法の一部は、「へ」の用法と重なる部分があり、この場合は無助詞になるといづれと対立させて考えるべきか判断することができないことが多い。たとえば、「学校 $\phi$ 行ったの？」の《ゼロ助詞》は「学校に行ったの？」と対比して考えるべきか、「学校へ行ったの？」と対比するべきか、決めることはできないだろう。ここでは、「へ」は「に」の一部の用法と重なる用法を持っていると見て、特に独立させて扱うことはしない<sup>36)</sup>。

36) 厳密に言えば、「へ」の用法の分布が、「に」の用法を記述することで網羅されるわけではないが、ここで扱う《ゼロ助詞》をめぐる問題の考察においては、特に支障がないと判断した。

#### 4. 3. 1. 存在の場所の二格

まず、事物などの存在する場所を表す用法について見る。

- 60a) 【友人が義男を探している。「義男はどこに行った？」と聞かれて答える】  
「教室にいるよ」
- 60b) 【友人が義男を探している。「義男はどこに行った？」と聞かれて答える】  
「教室φいるよ」
- 61a) 【学生が飯田先生を捜している。「飯田先生はどこにいますか？」と聞かれた教官が答える】  
「飯田先生は、研究室にいますよ」
- 61b) 【学生が飯田先生を捜している。「飯田先生はどこにいますか？」と聞かれた教官が答える】  
「飯田先生は、研究室φいますよ」
- 62a) 【息子に「僕の卒業証書φどこ？」と聞かれて、父親が答える】  
「物置にあるだろ」
- 62b) 【息子に「僕の卒業証書φどこ？」と聞かれて、父親が答える】  
「物置φあるだろ」
- 63a) 【知人と話をしている。「下町のことφ詳しいですね」と言われて、答える】  
「ええ。ずっと深川に住んでましたから」
- 63a) 【知人と話をしている。「下町のことφ詳しいですね」と言われて、答える】  
「ええ。ずっと深川φ住んでましたから」
- 64a) 【出かけようとしている。玄関で兄弟に尋ねる】  
「上野にタイ料理屋φあったっけ？」
- 64b) 【出かけようとしている。玄関で兄弟に尋ねる】  
「上野φタイ料理屋φあったっけ？」

これらは、助無助詞ではかなりくだけた口調になる。(62b)などは、場合によってはぞんざいな感じにも響く。(64)を除く(60)-(63)は、「に」がある場合と無助詞の場合で、この場面ではどちらも成立する。(64)については、「上野」が主題性を帯びているとも解することができ、その場合は「は」との対比を考えるほうが妥当になる。この点については、あとで議論する。

存在の場所を表す「に」は、しかし、つねに《ゼロ助詞》が可能なわけではない。

- 65a) 【父親が幼い子供に話しかける】  
「ほら、お月様が空に浮かんでいるよ」
- 65b) 【父親が幼い子供に話しかける】

\* 「ほら、お月様が空 $\phi$ 浮かんでいるよ」

66a) 【知人に富山市の説明をしている】

「富山の真ん中にお城がありましてね。今は、公園になっているんですけど」

66b) 【知人に富山市の説明をしている】

\* 「富山の真ん中 $\phi$ お城がありましてね。今は、公園になっているんですけど」

所在を表す「に」では、文体によっては無助詞の方が自然な例は見つかるものの、《ゼロ助詞》でなければならないという例はない。

#### 4. 3. 2. 移動の着点の二格

67a) 【「明日朝一番の新幹線で東京に行くんだよ」と言うのを聞いて、尋ねる】

「東京に着くの何時？」

67b) 【「明日朝一番の新幹線で東京に行くんだよ」と言うのを聞いて、尋ねる】

「東京 $\phi$ 着くの何時？」

68a) 【友人に電話している。友人が電話口に出たことを確かめた後、言う】

「ねえ、今日、大学に行った？」

68b) 【友人に電話している。友人が電話口に出たことを確かめた後、言う】

「ねえ、今日、大学 $\phi$ 行った？」

69a) 【友人と話している】

「今日、学校に行ったら、久しぶりに安岡君 $\phi$ 見かけたよ」

69a) 【友人と話している】

「今日、学校 $\phi$ 行ったら、久しぶりに安岡君 $\phi$ 見かけたよ」

以上の例でも、《ゼロ助詞》と有助詞のどちらも成立する。大きな意味の差を感じないかもしれない。また、以下の(70)-(72)でも(a)と(b)での意味の差がそれほどはっきり出るわけではない。

70a) 【出かけようとしている弟に、姉が尋ねる】

「ねえ、本屋に行く？」

70b) 【出かけようとしている弟に、姉が尋ねる】

「ねえ、本屋 $\phi$ 行く？」

71a) 【母親が車を運転している。助手席の子どもが母親に言う】

「ねえ、マックに寄ってよ」

71a) 【母親が車を運転している。助手席の子どもが母親に言う】

「ねえ、マック $\phi$ 寄ってよ」

72a) 【兄が弟に言う】

「勝手に俺の部屋に入るなよ」

72b) 【兄が弟に言う】

「勝手に俺の部屋  $\phi$  入るなよ」

よく観察すれば、「に」がある場合は総記的な解釈をする方が自然である。たとえば、(71)では、「マックに寄ってよ」の方が、「ほかならぬマック」という感じがする<sup>37)</sup>。この点は、また後で論じる。以下の例では、《ゼロ助詞》を使うと不自然もしくは不適切になる。

73a) 【高校で。先生が生徒に言う】

「授業時間以外は、勝手に理科室に入るなよ」

73b) 【高校で。先生が生徒に言う】

\* 「授業時間以外は、勝手に理科室  $\phi$  入るなよ」

74a) 【親が子どもを叱りながら言う】

「暗くなったら、あの裏通りに行くなって言ったでしょう！」

74a) 【親が子どもを叱りながら言う】

\* 「暗くなったら、あの裏通り  $\phi$  行くなって言ったでしょう！」

75a) 【野球の実況中継】

「打球は、センターの頭上を越えて、スタンドに入りました」

75b) 【野球の実況中継】

\* 「打球は、センターの頭上を越えて、スタンド  $\phi$  入りました」

以上の用例に徴する限り、着点の「に」の用法にも《ゼロ助詞》を認めることができる。

#### 4. 3. 3. 動作の相手を表す二格

動作の対象を表す二格について見ることにする。この用法では、一般に「AをBに…する」という形になることが多い。

76a) 【親が子供を叱って言う】

「このクッキーを明美にあげなさい」

76b) 【親が子供を叱って言う】

\* 「このクッキーを明美  $\phi$  あげなさい」

77a) 【子供が母親に言う】

37) 次のようにすると、総記的発話の方が自然になり、《ゼロ助詞》ではやや不自然な感じになる。

a) 【母親が車を運転している。助手席の子どもが母親に言う】

「ファミリーレストランでも寄ろうか?」「それなら、マックに寄ってよ」「ファミリーレストランでいいじゃない」「いやなの。マックに寄りたいの!」

b) 【母親が車を運転している。助手席の子どもが母親に言う】

「ファミリーレストランでも寄ろうか?」「それなら、マック  $\phi$  寄ってよ」「ファミリーレストランでいいじゃない」「いやなの。???マック  $\phi$  寄りたいの!」

「おじさんが僕に千円くれたよ」

77b) 【子供が母親に言う】

\* 「おじさんが僕 $\phi$ 千円くれたよ」

78a) 【友人に助言する】

「そういうことなら、高木先生に相談したら？」

78b) 【友人に助言する】

? 「そういうことなら、高木先生 $\phi$ 相談したら？」

79a) 【友人に助言する】

「申し込みは、金田に頼みなよ」

79b) 【友人に助言する】

??? 「申し込みは、金田 $\phi$ 頼みなよ」

(78b)(79b)では、かなりの俗調ということなら、不適切ということにはならないだろう。この用法の二格に関しては、一般に無助詞化が許されないが、ひどくくだけた話し言葉なら不可能でない場合もあるということになる。しかし、この場合の無助詞はやや例外的なものとして扱ってもいいかもしれない。

意味の差が大きいと考えられる《ゼロ助詞》は、やはり微妙である。

80a) 【友人同士の会話。「申し込み、どうしようかなあ」と言われて、助言する】

「金田に頼みなよ」

80b) 【友人同士の会話。「申し込み、どうしようかなあ」と言われて、助言する】

「金田 $\phi$ 頼みなよ」

81a) 【友人同士の会話。「申し込みのこと詳しい人いない？」と聞かれて、答える】

「山下に電話しようか」

81b) 【友人同士の会話。「申し込みのこと詳しい人いない？」と聞かれて、答える】

「山下 $\phi$ 電話しようか」

82a) 【友人同士の会話。遊びに行くのに車が必要だという話をしている。一方が言う】

「池田に借りられないかなあ」

82b) 【友人同士の会話。遊びに行くのに車が必要だという話をしている。一方が言う】

「池田 $\phi$ 借りられないかなあ」

83a) 【友人同士の会話。「あの話 $\phi$ 吉田にした？」と聞かれて答える】

\* 「吉田にしてないなあ」

83b) 【友人同士の会話。「あの話 $\phi$ 吉田にした？」と聞かれて答える】

「吉田 $\phi$ してないなあ」

「に」が使われている例では、二格の名詞句に焦点が当たっていると考えることができる用

例もある。(83)などは、そう解釈すると「に」がある場合の非文法性を説明できる。つまり、(83)のような場合では、「吉田にあの話をしたか」という問に対する答えとしては「していない」という内容を伝える部分が焦点であり、「吉田(に)」に焦点があることは不合理である<sup>38)</sup>。また、(82)を見ると、《ゼロ助詞》を使うと、「池田(に)」の部分が題目化する感じがする。(82a)では、「借りる」という点よりも「池田(に)」に焦点があり、「借りるということを前提で検討した場合に、『池田』はどうだろうか」という意味合いに解釈しやすい。(80a)(81a)では、「金田に」「山下に」に強勢があれば、焦点であることが分かりやすいが、強勢がなければ(a)と(b)の意味の差は曖昧である。

#### 4. 3. 4. 動作の対象を表す二格

この用法の「に」は、動作の方向性を表す動詞や対人的態度を表す動詞で用いられる。しかし、この用法の「に」は無助詞化できない。

##### 84a) 【友人同士の会話】

「俺に遠慮するなよ」

##### 84b) 【友人同士の会話】

\*「俺 $\phi$ 遠慮するなよ」

##### 85a) 【父親が子供に言う】

「いつまでも、親に甘えてられないぞ」

##### 85b) 【父親が子供に言う】

\*「いつまでも、親 $\phi$ 甘えてられないぞ」

無助詞の用例が非文とならず、解釈可能となる場合もあるが、その場合復元した助詞としてこの用法の「に」が出てくることはない。

##### 86) 【子供が親に言う】

「そんなふうに、僕 $\phi$ 怒らないでよ」

「僕に怒る」も「僕を怒る」もパターンとしてはあり得るが、(66)の無助詞を復元した形として前者を考えることはないであろう。

##### 87a) 【友人同士の会話】

「あいつの話に、ほんと、びっくりしたよ」

##### 87b) 【友人同士の会話】

「あいつの話 $\phi$ 、ほんと、びっくりしたよ」

38) 無論、焦点を当てるだけの理由があれば、「吉田(に)」に焦点が当たってもよい。「は」の分説性を利用して、「吉田(に)は、してない」と答えることもできる。この場合、「吉田には」と分説的に述べることの前提として、「他の人には話してある」という情報が得られることになる。談話における推定や前提知識の問題については、稿を改めて論じる。

この2つは明らかに意味が異なる。前者では、「あいつの話(に)」に焦点が当たっている。後者は「あいつの話」が題目のような扱いを受けている。(67)は、もう少し、文脈を与えて見ると、違いが分かりやすくなる。

88a) 【友人同士の会話】

「それでさ、あいつ、急に『悪いけど百万くらい貸してくんない?』って言ってさ。

\*あいつの話に、ほんと、びっくりしたよ」

88b) 【友人同士の会話】

「それでさ、あいつ、急に『悪いけど百万くらい貸してくんない?』って言ってさ。

あいつの話φ、ほんと、びっくりしたよ」

(88)の例では、件の人物が簡単に人に大金を借りようということがすでに常識的にびっくりする話なので、「びっくりしたんだけど、それは、あいつの話に対して、だ」というような解釈になる発話ではおかしいわけである。同じような例はいくらでも見つかる。

89a) 【友人同士で、ある名画について話している】

\*「あの映画に、ほんとに、泣けるよな」

89b) 【友人同士で、ある名画について話している】

「あの映画φ、ほんとに、泣けるよな」

(89b)は、《ゼロ助詞》を使うことでやはり題目のような扱いを受けている。しかし、「は」を使った用例と比較してみると、同じではないことがわかる。

89c) 【友人同士で、ある名画について話している】

「あの映画は、ほんとに、泣けるよな」

やはり、「は」では、分説的な解釈が優勢になる。(89c)で分説的な解釈を考えなければ、(89b)と(89c)はあまり差がなくなる。

#### 4. 3. 5. 状態の対象の二格

この用法の「に」は、形容詞の前で連用修飾成分になる。

90a) 【友人に、東京の地理に詳しいかどうか聞く】

「おまえさ、東京の地理に詳しい?」

90b) 【友人に、東京の地理に詳しいかどうか聞く】

「おまえさ、東京の地理φ詳しい?」

91a) 【初冬の戸外。寒がって震えている友人に「ずいぶん寒そうだね」と言うと、その友人が答えて言う】

「私φ寒いのに弱いのに」

91b) 【初冬の戸外。寒がって震えている友人に「ずいぶん寒そうだね」と言うと、その友人

が答えて言う】

「私  $\phi$  寒い  $\phi$  弱い  $\phi$  の」

92a) 【いくつかの計算をすばやく暗算で答えてしまったのを見て、言う】

? 「大竹君  $\phi$ 、計算に強いね」

92b) 【いくつかの計算をすばやく暗算で答えてしまったのを見て、言う】

「大竹君  $\phi$ 、計算  $\phi$  強いね」

以上の用例では、あまり意味の差が感じられないかもしれない。しかし、よく検討すると、「に」のある場合の方では、二格の名詞句に焦点が当たっていると解釈することができる。(92a) では、「なにに強いかというと、計算に強い」という意味に解釈することができ、そうになると発話としてはやや不自然である。(90b) (91b) (92b) は、《ゼロ助詞》がついて題目化していると見ることもできる。これらは、「東京の地理は詳しい?」「寒いのは弱い?」「計算は強いね」では、「は」の分説性ゆえに《ゼロ助詞》と意味が異なっている。次は、助詞の有無で決定的に異なる例である。

93a) 【友人同士の会話。恋人について話している】

「あいつ  $\phi$ 、最近、俺に冷たくてさ」

93b) 【友人同士の会話。恋人について話している】

\* 「あいつ  $\phi$ 、最近、俺、冷たくてさ」

#### 4. 3. 6. 移動動作の目的の二格

この用法の「に」は、「買い物に行く」などと用いられる際の「に」を指している。

94a) 【父親が息子に「母さん  $\phi$  どこ行った?」と尋ね、息子が答える】

「買い物に行ったよ」

94b) 【父親が息子に「母さん  $\phi$  どこ行った?」と尋ね、息子が答える】

「買い物  $\phi$  行ったよ」

95a) 【友人が「今日は、ほんとに天気がいいなあ」と言ったのを受けて、釣りに誘う】

「じゃあ、釣りに行かない?」

95b) 【友人が「今日は、ほんとに天気がいいなあ」と言ったのを受けて、釣りに誘う】

「じゃあ、釣り  $\phi$  行かない?」

この二格は、動詞の連用形のあとでは省略できない。但し、「釣り」のように出自が動詞連用形でもそれ自体が名詞化されているものは、この限りではない<sup>39)</sup>。

39) 但し、最近、「に」をつけないで言う用例を耳にする。たとえば、「飯食いに行って来るよ」を、「飯食い一行って来るよ」のように言うものであるが、これは、現時点ではかなり俗調であること、一般に代償延長が生じており、文法論以前に音声論として研究する必要があること、使用者が限られていること、などを理由にここでは扱わない。代償延長は必ず生じるとも言えないように思う。

- 96a) 【昼休みに、伊藤君がいないのに気づき、教師がほかの生徒に「伊藤君はどうしたの？」と聞く。それに、生徒の一人が答える】  
「忘れ物を取りに家に戻りました」
- 96b) 【昼休みに、伊藤君がいないのに気づき、教師がほかの生徒に「伊藤君はどうしたの？」と聞く。それに、生徒の一人が答える】  
\* 「忘れ物を取り $\phi$ 家に戻りました」

#### 4. 3. 7. 受動文に現れる二格

受動文にも「に」は現れる。「僕は美子に殴られた」などの二格である。

- 97a) 【友人に、「どうしたの？ 目のところ、あざになってるよ」と言われたのに、答える】  
「実は、美子に殴られてね」
- 97b) 【友人に、「どうしたの？ 目のところ、あざになってるよ」と言われたのに、答える】  
\* 「実は、美子 $\phi$ 殴られてね」
- 98a) 【部下に「明日の会議は何時からですか？」と聞かれて、答える】  
「忘れてたよ。君に言われて思い出したよ」
- 98b) 【部下に「明日の会議は何時からですか？」と聞かれて、答える】  
\* 「忘れてたよ。君 $\phi$ 言われて思い出したよ」
- 99a) 【作家が原稿を執筆している。横でじっと見ている編集者に言う】  
「君にそこにいられると、書きにくいなあ」
- 99b) 【作家が原稿を執筆している。横でじっと見ている編集者に言う】  
\* 「君 $\phi$ そこにいられると、書きにくいなあ」

実は、(99)は間接受動文であるが、(97)(98)の直接受動文の場合と同じで、この「に」はどうしても必要である。ただ、次の(100)のような例では、無助詞でもひどく不自然ということはない。

- 100a) 【ずぶぬれの吉岡に知人が「どうしたんですか、吉岡さん？」と尋ね、それに吉岡が答える】  
「にわか雨に降られちゃってね」
- 100b) 【ずぶぬれの吉岡に知人が「どうしたんですか、吉岡さん？」と尋ね、それに吉岡が答える】  
? 「にわか雨 $\phi$ 降られちゃってね」

#### 4. 3. 8. 使役文に現れる二格

ここでは、「信次に行かせる」のような使役文の使役の対象をマークする二格について見る。

101a) 【サークルの会合。「次のオリエンテーション、誰が挨拶するの?」という質問に、一人  
が答える】

「小西に挨拶させようよ」

101b) 【サークルの会合。「次のオリエンテーション、誰が挨拶するの?」という質問に、一人  
が答える】

\* 「小西  $\phi$  挨拶させようよ」

102a) 【サークルの会合。「合宿先を誰に下見させようか?」という質問に、一人が答える】

「橋本に下見させたら?」

102b) 【サークルの会合。「合宿先を誰に下見させようか?」という質問に、一人が答える】

\* 「橋本  $\phi$  下見させたら?」

以上の例を見る限り、《ゼロ助詞》の使用はできないようである。しかし、次の(103)のよ  
うに、《ゼロ助詞》を使っているように見える例もある。

103) 【学園祭の説明会にサークル代表として誰を派遣するか話している。「誰  $\phi$  行かせる?」  
という問いかけに、一人が答える】

「小山  $\phi$  行かせようか」

しかし、(103)の無助詞の部分に格助詞を補うとすれば、「小山に行かせようか」ではなく  
「小山を行かせようか」である可能性もあり、これが使役文の二格としての《ゼロ助詞》である  
証拠にはならない。やはり、全体的に見て、明らかに使役の二格に対して用いられていると言  
える《ゼロ助詞》はないと考えた方がよいだろう。

#### 4. 3. 9. 連用成分を示す「に」

主に、いわゆる形容動詞の連用形で現れる「に」を、連用成分をマークする「に」として見  
てみる。形容動詞という品詞を伝統的な文法論の枠組みで認めるなら、「静かに」「特別に」な  
どの「に」は、形容動詞の活用語尾であって、格助詞の「に」ではない。形容動詞という品詞  
を廃止するならば、「に」をどう扱うかが問題になる。無論、その場合に、「に」を格助詞に含  
めなければならないということは全くない。それは、文法論の枠組み次第である。

結論から先に言うと、この「に」は無助詞にすることはできない。「に」のない形もあるが、  
それは「に」がある場合とで意味が明らかに異なっている。ただし、この意味の異なりは、談  
話的なものではなく、文意味のレベルで確認できるものであり、通例文脈その他の影響は受け  
ない。

104a) 【親が子どもを叱って言う】

「静かにテレビを見ていられないの?」

104b) 【親が子どもを叱って言う】

\*「静か $\phi$ テレビを見てられないの？」

- 105a) \*このスープは特別に辛いね。  
 105a) このスープは特別 $\phi$ 辛いね。  
 106a) このスープは特別に辛くしてやろう。  
 106b) このスープは特別 $\phi$ 辛くしてやろう。(i.e. = (106a))  
 107a) そんな変な歌い方しないで、ふつうに歌えよ。  
 107b) \*そんな変な歌い方しないで、ふつう $\phi$ 歌えよ。  
 108a) \*そんなきつい言い方は、ふつうにしないよ。(i.e. = (108b))  
 108b) そんなきつい言い方は、ふつう $\phi$ しないよ。

「静か」をそのまま副詞的に使うことはない。また、「特別」と「特別に」は、前者が程度副詞となっているのに対し、後者がその事態の評価としての特別性に言及しているという点で、異なっている。「ふつう」と「ふつうに」も、それぞれが「通常の場合」と「通常の様子で、通常の状態」の意味であるという点で異なっている。これらは、「に」の省略や《ゼロ助詞》という次元で議論すべき事象ではない。

#### 4. 4. デ格

これまでの無助詞の研究は、ガ格・ヲ格・ニ格が中心で、デ格を詳しく論じたものは見あたらない。

##### 4. 4. 1. 場所のデ格

- 109a) 【友人に電話をかけ、相手が電話口に出たと確認した後】  
 「今日さ、駅で浜田君、見かけたよ」  
 109b) 【友人に電話をかけ、相手が電話口に出たと確認した後】  
 \*「今日さ、駅 $\phi$ 浜田君、見かけたよ」  
 110a) 【神父さんがカップルに教会での結婚式の段取りを説明している】  
 「まっすぐに歩いてきて、ここで立ち止まって、一礼してください」  
 110b) 【神父さんがカップルに教会での結婚式の段取りを説明している】  
 \*「まっすぐに歩いてきて、ここ $\phi$ 立ち止まって、一礼してください」  
 111a) 【大学生が教室に入ってくるなりクラスメイトに言う】  
 「正門のところで事故 $\phi$ あったみたいだぞ」  
 111b) 【大学生が教室に入ってくるなりクラスメイトに言う】  
 「正門のところ $\phi$ 事故 $\phi$ あったみたいだぞ」  
 112a) 【学生がサークルの打ち合わせの場所を探している。「誰かの家でやればいいんだけど

なあ」と言ったのに答えて】

「俺の下宿でやってもいいよ」

112b) 【学生がサークルの打ち合わせの場所を探している。「誰かの家でやればいんだけど

なあ」と言ったのに答えて】

「俺の下宿φやってもいいよ」

(111b) (112b) のような例文では、自然ではないと判断する人もあるだろう。しかし、《ゼロ助詞》の位置に1 モーラ分程度のポーズを置いて言えば、(109b) (110b) ほどの不自然さはない。また、以下の例では、《ゼロ助詞》が使える。

113a) 【高校時代の同級生同士が話している。二人は、別の大学に通っている。電話で話しているとき、急に話題を転換し、一方が他方に尋ねる】

「おまえの大学で音声学φ選択できる？」

113b) 【高校時代の同級生同士が話している。二人は、別の大学に通っている。電話で話しているとき、急に話題を転換し、一方が他方に尋ねる】

「おまえの大学φ音声学φ選択できる？」

(113b) などは、格助詞を復元すると「で」になるが、「おまえの大学」の部分が「は」をつけてもいいような主題性を持っていると見ることができる。

また、純然たる場所とはやや異なるが、場所のデ格と見ていい次のような例でも《ゼロ助詞》を確認できる。

114a) 【街で知り合いとばったり出くわし、話しかける】

「いやあ、俺φ競馬で負けちゃってさあ」

114b) 【街で知り合いとばったり出くわし、話しかける】

「いやあ、俺φ競馬φ負けちゃってさあ」

115a) 【友人に、「景気よさそうじゃないか」と声をかけられて、それに答える】

「パチンコで勝ってねえ」

115b) 【友人に、「景気よさそうじゃないか」と声をかけられて、それに答える】

「パチンコφ勝ってねえ」

116a) 【父親に「なんで、にこにこしてるの?」と尋ねられ、息子が答える】

「地理の試験で満点とったんだ」

116b) 【父親に「なんで、にこにこしてるの?」と尋ねられ、息子が答える】

「地理の試験φ満点とったんだ」

117a) 【あるコンクールの地方大会で優勝した学生にインタビューする】

「全国大会で優勝する自信はありますか？」

117b) 【あるコンクールの地方大会で優勝した学生にインタビューする】

「全国大会 $\phi$ 優勝する自信はありますか？」

これらは「で」によって、抽象的な領域や分野などが表示されている。また、特に(117)などで明かであるが、これらは主題化していると見ることができる。(117)などは、「全国大会は…」と始めても成り立つだろう。

#### 4. 4. 2. 道具・手段のデ格

道具や手段を表す「で」の位置を無助詞にすることはできないようだ。

113a) 【赤のボールペンで申込用紙に記入しようとする友人に】

「赤ペンで書くなよ」

113b) 【赤のボールペンで申込用紙に記入しようとする友人に】

\* 「赤ペン $\phi$ 書くなよ」

114a) 【「駅まで送ろうか」と申し出てくれた友人に】

「雨も降ってきたし、俺 $\phi$ タクシーで帰るよ」

114b) 【「駅まで送ろうか」と申し出てくれた友人に】

\* 「雨も降ってきたし、俺 $\phi$ タクシー $\phi$ 帰るよ」

#### 4. 4. 3. 材料のデ格

材料を表す「で」も無助詞にはできない。

115a) 【小学校の教室。教師が生徒たちに】

「今日は、粘土で好きなものを作しましょう」

115b) 【小学校の教室。教師が生徒たちに】

\* 「今日は、粘土 $\phi$ 好きなものを作しましょう」

116a) 【親が子供に卵を見せながら】

「卵でなにか作ってあげるね」

116b) 【親が子供に卵を見せながら】

\* 「卵 $\phi$ なにか作ってあげるね」

#### 4. 4. 4. 原因のデ格

原因を表す「で」も無助詞が可能になる例が見当たらない。

117a) 【友人に「顔色 $\phi$ 悪いよ」と言われたのに答えて】

「昨夜から、風邪で体調が悪くてさ」

117b) 【友人に「顔色 $\phi$ 悪いよ」と言われたのに答えて】

\* 「昨夜から、風邪 $\phi$ 体調が悪くてさ」

- 118a) 【飛行機で行くはずだった旅行を急遽列車で行くことにした理由を尋ねられて】  
「この台風で、明日、飛行機 $\phi$ 飛びそうにないからね」
- 118b) 【飛行機で行くはずだった旅行を急遽列車で行くことにした理由を尋ねられて】  
\* 「この台風 $\phi$ 、明日、飛行機 $\phi$ 飛びそうにないからね」

#### 4. 4. 5. 限定的な範囲を表すデ格

この用法の「で」は無助詞が必ずしも非文になるわけではない。まず、この種の「で」が不適切である例から見ておく。

- 119a) 【書店で。友人同士の会話。一方がある本を指さしながら言う】  
「この本 $\phi$ 名古屋でベストセラーになってるらしいよ」
- 119b) 【書店で。友人同士の会話。一方がある本を指さしながら言う】  
\* 「この本 $\phi$ 名古屋 $\phi$ ベストセラーになってるらしいよ」
- 120a) 【大学改革について大勢の前で説明し始める】  
「私たちの大学で改革に反対する人はむしろ少数でした」
- 120b) 【大学改革について大勢の前で説明し始める】  
\* 「私たちの大学 $\phi$ 改革に反対する人はむしろ少数でした」

しかし、以下のような例ではデ格の位置に《ゼロ助詞》が現れる。ただ、これは意味の近いもとの助詞を復元すると、「で」というよりは、「では」あるいは「は」になる。

- 121a) 【台湾出身の知り合いに尋ねる】  
「台湾で旧暦 $\phi$ 使ってるよね？」
- 121b) 【台湾出身の知り合いに尋ねる】  
「台湾 $\phi$ 旧暦 $\phi$ 使ってるよね？」
- 121c) 【台湾出身の知り合いに尋ねる】  
「台湾では旧暦 $\phi$ 使ってるよね？」
- 121d) 【台湾出身の知り合いに尋ねる】  
「台湾は旧暦 $\phi$ 使ってるよね？」

また以下のような例では「が」や「は」にした方がより発話の意図に近いかもしれない。

- 122a) 【普段家で飲んでいる日本酒の銘柄について話している】  
「うちで飲んでいるのは月桂冠」
- 122b) 【普段家で飲んでいる日本酒の銘柄について話している】  
「うち $\phi$ 飲んでいるのは月桂冠」
- 122c) 【普段家で飲んでいる日本酒の銘柄について話している】  
「うちが飲んでいるのは月桂冠」

#### 4. 4. 6. 動作主体を表すデ格

動作主体を表すデ格も前節と事情がよく似ている。復元して助詞を入れてみると「で」よりも「が」あるいは「は」のほうが発話の意図をもっとも的確に反映していると思われるのである。

103a) 【片づけを手伝おうとした人に言う】

「後は私たちでやりますので」

103b) 【片づけを手伝おうとした人に言う】

「後は私たち $\phi$ やりますので」

103c) 【片づけを手伝おうとした人に言う】

「後は私たちがやりますので」

104a) 【ある大学について噂している】

「A大学で学部新設を計画してるらしいよ」

104b) 【ある大学について噂している】

「A大学 $\phi$ 学部新設を計画してるらしいよ」

104c) 【ある大学について噂している】

「A大学は学部新設を計画してるらしいよ」

限定的な範囲を表す「で」や動作主体を表す「で」が《ゼロ助詞》化することができるのであれば、これは、かなり主題性が高まっていることと表裏をなすと言える。この点は、丹羽哲也(1989)の主張に合致している。但し、丹羽(ibid.)は主題性が高まれば特に助詞を問わずに無助詞化が可能であるとしているが、用法による制限があることは我々が確認しているとおりである。

#### 4. 4. 7. 様態のデ格

様態を表すデ格は、無助詞にすることはできない。

125a) 【親が子どもに向かって注意する】

「掃除したばかりなんだから、裸足で歩くなよ」

125b) 【親が子どもに向かって注意する】

\* 「掃除したばかりなんだから、裸足 $\phi$ 歩くなよ」

126a) 【母親が町内の旅行に娘を誘う。娘がそれに答える】

「団体であちこち行くの $\phi$ いやだな」

126b) 【母親が町内の旅行に娘を誘う。娘がそれに答える】

\* 「団体 $\phi$ あちこち行くの $\phi$ いやだな」

「一人で」の「で」が落ちた「一人」という形態があるが、これは文体のみならず意味も異

なっている。

127a) 一人で電車に乗る。

127b) 一人\_電車に乗る<sup>40)</sup>。

後者の「一人」は副詞的に機能しているが、「電車に乗った」時の状況が「一人」であったということであり、共同作業でないことを表す「一人で」とは意味がずれている。従って、本質的に、他人の動作については「一人で」は不自然となる。

128a) ??? 一人で悲しみに暮れる。

128b) 一人\_悲しみに暮れる。

また、逆に事態を結果的に評価して「一人」であったと述べるのであれば「一人」が不適切となる。

129a) 一人で行けよ。

129b) \*一人\_行けよ。

これらは語彙機能だけでなく、さまざまな相違を含んでおり、同一語の有助詞形と無助詞形と見るべき根拠は全くない。《ゼロ助詞》の現象とは別と見るべきだろう。

#### 4. 4. 8. 限度のデ格

限度を表す「で」は無助詞にできない。

130a) 【「申し込みれば誰でも受講できますか」という質問に答えて】

「いいえ。百人で募集をうち切ります」

130b) 【「申し込みれば誰でも受講できますか」という質問に答えて】

\* 「いいえ。百人 $\phi$ 募集をうち切ります」

131a) 【お店の営業時間を聞かれて答える】

「8時で閉店します」

131b) 【お店の営業時間を聞かれて答える】

「8時 $\phi$ 閉店します」

#### 4. 4. 9. 基準のデ格

基準の「で」は無助詞が可能ながあるが、無制限に可能なわけではない。

132a) 【靴下を安く買ったという話をしたところ、値段を聞かれて答える】

「三枚で 800円」

132b) 【靴下を安く買ったという話をしたところ、値段を聞かれて答える】

---

40) 「一人」は副詞とみなす考えもあり得るので、ここでは《ゼロ助詞》の表示をしない。この点については、稿を改めて論じる。

「三枚φ 800円」

但し、長く丁寧な文では無助詞が不自然になる。

133a) 【遊園地に5人で連れ立って入ろうとする。窓口で料金を払うときに】

「それでは、五名様で 17,500円になります」

133b) 【遊園地に5人で連れ立って入ろうとする。窓口で料金を払うときに】

??? 「それでは、五名様φ 17,500円になります」

#### 4. 4. 10. デ格のまとめ

デ格の名詞句で無助詞になる用法として考えるべきは、実質的には「場所を表すデ格」のみだと言えるだろう。この場合の「場所」には、抽象的な場所や領域・分野、またその拡張用法も含む。ほかに、最前検討した「基準を表す用法」もあるが、これは用法の狭さや無助詞化の条件の特異性からやや例外的なものとして扱ってもよいように思われる。

#### 4. 5. ト格

格助詞の「と」は無助詞にできない。「と」は共同動作の相手を表すほか、「同じ」「違う」など関係を表す表現で比較の対象をマークするのに用いられる。いずれの用法でも無助詞にはできない。

134a) 【友人と北海道に行ったときのことを話している。「一人で行ったの?」と聞かれて】

「桜井と行ったんだよ」

134b) 【友人と北海道に行ったときのことを話している。「一人で行ったの?」と聞かれて】

\* 「桜井φ行ったんだよ」

135a) 【試験の成績がよかった理由を聞かれて】

「前の日勉強した問題と同じだったんだよ」

135b) 【試験の成績がよかった理由を聞かれて】

\* 「前の日勉強した問題φ同じだったんだよ」

接続助詞の「と」は、関西方言などで「行こうφ思たんやけど」のように話し言葉で無助詞になることがあるが、東京方言ではこの種の無助詞は見られない。本稿では格助詞について検討しているので、この点は論じない。

#### 4. 6. ノ格

これまで取り上げた助詞と「の」は性質を異にしている。「が・を・に・へ・で・と」などは連用修飾成分を作るが、「の」は一般に(従属節での「ガ / ノ交替」などの現象を除けば)連体修飾成分を形成する。「の」は用法ごとに分けずに、全体的に無助詞が成立する条件を検討す

る。また、「の」の無助詞と見ることも不可能ではないが、総主文の助詞の無助詞化と見るべきものもある。

136a) 【東京に初めて出てきた友人と皇居付近を歩いていると、その友人が言う】

「東京 $\phi$ 緑 $\phi$ 多いね」

これは、次の(136b)のよう助詞を復元して補充すると不自然である。(116c)のように考える方が自然だろう。

136b) 【東京に初めて出てきた友人と皇居付近を歩いていると、その友人が言う】

\*「東京の緑は多いね」

これはもちろん「は」でなく「が」にしても不自然であり、無助詞にして、「東京の緑 $\phi$ 多いね」でもおかしい。つまり、「の」が用いられていることに不自然さの主因があると考えべきである。

136c) 【東京に初めて出てきた友人と皇居付近を歩いていると、その友人が言う】

「東京は緑が多いね」

次の例文に関しても同じことが言える。

137a) 【職場の同僚同士の会話。一方が「最近、課長の機嫌がよくて、ほんと助かるよ」と言ったのに対して】

「課長 $\phi$ お子さんが大学に受かったのよ」

137b) 【職場の同僚同士の会話。一方が「最近、課長の機嫌がよくて、ほんと助かるよ」と言ったのに対して】

??? 「課長のお子さんが大学に受かったのよ」

137c) 【職場の同僚同士の会話。一方が「最近、課長の機嫌がよくて、ほんと助かるよ」と言ったのに対して】

「課長はお子さんが大学に受かったのよ」

(137b)のように「課長のお子さんが…」とするとひどく不自然である。また、次の例でも「の」を考えると、やや不自然である。(138b)のように「お前のヒゲ…」というよりは(138c)のように「お前は、ヒゲ…」と考えた方が、(138a)の発話意図に近いであろう。

138a) 【友人の顔をまじまじと見ながら言う】

「お前 $\phi$ ヒゲ $\phi$ 濃いな」

138b) 【友人の顔をまじまじと見ながら言う】

「お前のヒゲ $\phi$ 濃いな」

138c) 【友人の顔をまじまじと見ながら言う】

「お前はヒゲ $\phi$ 濃いな」

(138b)では「お前のヒゲ」が主題化している。これらは統語構造上「の」を挿入することは

不可能ではないが、文脈の中での《ゼロ助詞》の機能を考えている本稿の立場からすれば、「の」の無助詞化の例とは見るわけに行かない。これらは、「課長」や「お前」が主題化していることから分かるように、総主文の無助詞化として扱う必要がある。4.7. 節で論じることにする。

さて、本稿で「の」の無助詞化と見るのは、以下のような例である。

- 139a) 【居間。姉が窓を指さしながら、弟に向かって言う】  
「その窓  $\phi$  しめて」
- 139b) 【居間。姉が窓を指さしながら、弟に向かって言う】  
「そこ  $\phi$  窓  $\phi$  しめて」
- 140a) 【風呂から上がって夫に妻が尋ねる】  
「ねえ、お風呂のガス  $\phi$  止めた？」
- 140b) 【風呂から上がって夫に妻が尋ねる】  
「ねえ、お風呂  $\phi$  ガス  $\phi$  止めた？」
- 141a) 【妹が一人大音量で音楽を聴いているところに、兄が来て言う】  
「おい、ステレオのボリューム  $\phi$  下げろよ」
- 141b) 【妹が一人大音量で音楽を聴いているところに、兄が来て言う】  
「おい、ステレオ  $\phi$  ボリューム  $\phi$  下げろよ」
- 142a) 【遅刻して駆け込んできた同僚に「どうしたの?」と尋ねる。それに同僚が答えて】  
「いやあ、総武線の電車  $\phi$  止まっちゃってさあ」
- 142b) 【遅刻して駆け込んできた同僚に「どうしたの?」と尋ねる。それに同僚が答えて】  
「いやあ、総武線  $\phi$  電車  $\phi$  止まっちゃってさあ」

実は、これらも最初の無助詞名詞が主題化しているという点では、先ほどの総主文の無助詞化のよう例に近いところがある。細かい機能の差は、4.7. で検討することにして、これらが全体と部分の関係が成立していることを確認しておこう。

これらの用例は、そこ（という場所）と窓、お風呂とガス、ステレオとボリューム、総武線と電車がいずれも、《全体と部分》という関係になっている。後者が、前者の一部として属していると言ってもいい。「の」は常にこういう関係を表示しているわけではなく、「君のカバン」などは全体と部分という関係にはなっていない。

- 143a) 【カバンの留め金が壊れているのに気づいて、言う】  
「君のカバン  $\phi$  壊れてるぞ」
- 143b) 【カバンの留め金が壊れているのに気づいて、言う】  
??? 「君  $\phi$  カバン  $\phi$  壊れてるぞ」

後者が非文にならないと感じる人も、両者の意味が同じだと思ふことはあるまい。後者は、明らかに総主文の無助詞化文で「君はカバンが壊れているぞ」を無助詞化したものである。そ

こで、以下のような仮説を立てておくことにする。

#### 144) 「の」の《ゼロ助詞》化に関する規則

「X ノ Y」という形態の名詞句で「の」に関して《ゼロ助詞》化が可能である場合には、X と Y は《全体と部分》の関係でなければならない。すなわち、「《全体》ノ《部分》」という意味関係が成り立つ場合にのみ、「の」の無助詞化がライセンスされる。

無論、全体と部分の順序が逆転してはいけない<sup>41)</sup>。以上の例文でも、「\*ガスφ風呂φ止めた?」や「\*ボリュームφステレオφ下げろよ」や「\*電車φ総武線φ止まっちゃってさあ」は不適切である。(139)だけは、「窓φそこφしめて」が成立するが、これは、(139b)の「そこφ窓φしめて」とは意味が異なっており、「窓」のうち「そこ」にあるものを「しめて」ということであり、やはり《全体と部分》の関係が成立している。

#### 4. 6. その他の格

どの助詞を格助詞とするかについては、いくつかの見解があり、唯一の統一の見解が与えられているわけではない。ここまでで扱った「が・を・に・で・へ・と・の」のほかに検討すべきは、「まで・より・から」などであろう。「まで・より」などは格助詞と認めない学者もあるが、ここでは、一応格助詞として検討しておく。

145) 大学から自宅まで歩く。

146) 去年より今年は桜の開花が早かった。

147) 朝から晩まで図書館にいた。

これらの例文中の「まで・より・から」はどんな文脈環境をつくっても無助詞にすることができない<sup>42)</sup>。

#### 4.7. 総主文など

総主文とは、「象は鼻が長い」といった、《X は Y が Z》という形式をとる文の総称であるが、この種の文でも《ゼロ助詞》を確認することができる。(136a)の「東京φ緑φ多いね」、(137a)の「課長φお子さんが大学に受かったのよ」、(138a)の「お前φヒゲφ濃いな」などもそうであるが、ほかにも多くの用例がある。

41) 「鱈寿司の富山」「食い道楽の大阪」などの例は、一見、逆転した《部分と全体》の関係のように見えるが、全体に付属している部分かという観点で見ると、そもそもこれらは互いに部分でも全体でもないということが分かる。

42) 「ここφ市街地が一望できるんだ」のような例文では《ゼロ助詞》を「から」で復元することも可能である。しかし、「ここは」という主題と見る方が自然であり、「から」とは少し発話自体の意味がずれている。「から」の無助詞形と見る積極的な証左はない。

- 148a) 【東大のキャンパスを歩きながら】  
「東大φ意外と女子φ多いね」
- 148b) 【東大のキャンパスを歩きながら】  
「東大は意外と女子が多いね」
- 149a) 【「フランス語φ始めてみようかな」という友人に】  
「フランス語φ発音φ難しいよ」
- 149b) 【「フランス語φ始めてみようかな」という友人に】  
「フランス語は発音が難しいよ」

(148a) (149a)は、それぞれ (148b) (149b) の総主文の無助詞化によって生じたと見ることができる。しかも、これらは、「は」もしくは「が」のみの一方の助詞を残し、他方を無助詞にすること可能である。

- 148c) 【東大のキャンパスを歩きながら】  
「東大は意外と女子φ多いね」
- 148d) 【東大のキャンパスを歩きながら】  
「東大φ意外と女子が多いね」
- 149c) 【「フランス語φ始めてみようかな」という友人に】  
「フランス語は発音φ難しいよ」
- 149d) 【「フランス語φ始めてみようかな」という友人に】  
? 「フランス語φ発音が難しいよ」

「は」を無助詞にして「が」を残すとやや座りがわるいこともあるようだ。(149d)では、「フランス語ではなにが難しい」といって発音が難しい」といった意味合いになっており、友人は「フランス語が難しい」あるいは「フランス語(の学習)で難しい要素がある」ということは一切言っていないので、フランス語の学習には何か難しいことがあるといった前提があるような発言になっている(149d)は不自然なのである。逆に言えば、(149d)では、「フランス語は X が難しい」という前提があり、「発音」に焦点が当たっているのである。(148d)がそれほど不自然でないのは、「大学に関してある種のものが多く存在する」という特質について語ることは特に前提がなければ語れないような特殊・特定の内容ではない。また、「学生の男女数(あるいは男女比)」について語ることは、現にキャンパス内に存在する男子学生・女子学生を目にしている状況では、唐突ということがない。しかし、焦点が当たっていることは事実で、「男子ではなく女子こそが多い」という(どういう基準をもとにしているかは分からないが)判断を下していることは確かである。

- 150a) 【珍しくワンピースを着ている洋子を見ながら、友人同士が話している】  
「洋子ちゃんφあのワンピースφ似合うね」

150b) 【珍しくワンピースを着ている洋子を見ながら、友人同士が話している】

「洋子ちゃんはそのワンピースが似合うね」

150c) 【珍しくワンピースを着ている洋子を見ながら、友人同士が話している】

「洋子ちゃんはそのワンピースφ似合うね」

150d) 【珍しくワンピースを着ている洋子を見ながら、友人同士が話している】

「洋子ちゃんφそのワンピースが似合うね」

(150) ではより違いが鮮明になる。(150b) (150d) のように「が」があるものでは「ほかならぬ、あのワンピースが似合う」という意味が前面に出てくる。これに対し、「が」のない(150a) (150c) では、「あのワンピース」は「彼女に似合っている」ということだけを伝えており、ほかのワンピースではなく「あのワンピース」こそがという排他的な意味を感じることはない。「が」という格助詞があれば、排他的解釈が生じうるということは確認できる。そういう前提で(148) (149) を見てみると、これらでは(150)ほど明確な差が出てこない。これは、(150) では「あのワンピース」というかなり特定度の高い指示をしているのに対し、(148) (149) の「(人間の種類における) 女子」「(語学の難しさの要素のうちの) 発音」などはあまり特定度が高いと言えないことと関係しているのだろう。

151a) 【公園を歩きながら話している】

「この公園φ桜の木φ多いね」

151b) 【公園を歩きながら話している】

「この公園は桜の木が多いね」

151c) 【公園を歩きながら話している】

「この公園は桜の木φ多いね」

151d) 【公園を歩きながら話している】

「この公園φ桜の木が多いね」

やはり、「が」のある(151b) (151d)では、「ほかの木ではなく桜の木が多い」あるいは「ほかの木よりも桜の木が多い」という意味合いが強くなる。公園に植わっている木の種類のうちで「桜の木」というのはやや特定度が高いということが言えるからだろう。逆に、非常に特定度の高い場合では、以下のように「が」をつかった排他的解釈がなされないと不自然になる。

152a) 【ラーメン屋でラーメンを前に、友人に言う】

? 「この店φこのみそラーメンφうまいんだよ」

152b) 【ラーメン屋でラーメンを前に、友人に言う】

「この店はこのみそラーメンがうまいんだよ」

152c) 【ラーメン屋でラーメンを前に、友人に言う】

??? 「この店はこのみそラーメンφうまいんだよ」

152d) 【ラーメン屋でラーメンを前に、友人に言う】

「この店φこのみそラーメンがうまいんだよ」

特に、(152c) は不自然だろう。《ゼロ助詞》の機能と、排他的解釈、また焦点と前提の問題については、第5章で詳しく論じる。

#### 4. 8. 格と無助詞の対応のまとめ

まず、ガ格ヲ格では用法による無助詞化の制限はない。「に」は、直接受動文・使役文・（形容動詞などを）連用成分にする用法などでは無助詞化ができないが、それ以外の一般的用法では無助詞化が可能になることがある。《ゼロ助詞》が用いられている場合は主題性が高まっていると解釈できる場合もある。「へ」は、「に」の用法の一部と重なっていると見ることができ、無助詞化が可能である。「で」は基準の用法をやや例外的なものを見ると、場所の用法（領域や分野など広い意味での「場所」、拡張用法なども含む）でのみ無助詞化が可能で、それ以外の用法では無助詞化できない。「に」は「へ」と重なる用法を含む多くの用法で無助詞化が見られるのに対し、「で」は無助詞化はきわめて限られている。場所を表す用法では、「に」でも「で」の《ゼロ助詞》を観察できる。

「と」「から」「まで」「より」では、いずれの用法でも無助詞化は不可能である。つまり、「が・を」はどの用法でも無助詞化が可能、「と・から・まで・より」はどの用法でも無助詞化が不可能、その中間のグレーゾーンにあるのが、「に」と「で」だと言えよう。「へ」は基本的に広意味での場所格用法のみなので、用法によらず無助詞化が可能だということになるが、本稿では「に」の一変種として扱った。格助詞の無助詞化にも、格助詞の階層が反映しているという指摘<sup>43)</sup>があるが、ある意味でここまでの検討はこの指摘と矛盾しないと言えるだろう。これを、まとめておこう。

#### 格・用法と無助詞化

が・を	に	で	と・から・まで・より
	へ		
無助詞化可能		無助詞化不可能	

「の」も無助詞化が可能であるが、これは上の格助詞とはやや問題の性質に違いがあると考えた方がよさそうである。「の」の無助詞化は、「X の Y」が「《全体》の《部分》」という意味関係になっている場合に限られる。

43) 角田太作氏（東大文学部文化交流施設教授）よりの私信。

153a) 【自分の子供を友人に紹介する】

「これが、うちの子です」

153b) 【自分の子供を友人に紹介する】

\* 「これが、うちの子です」

この例では「《全体》の《部分》」という意味関係が成り立っていないので非文となる。また、全体と部分の関係は物理的なものでなければならない。

154) 【居間。兄が弟に言う】

「その窓の鍵を掛けろよ」

上の例文では、「窓」と「鍵」が物理的な全体と部分の関係を満たしている。しかし、これまでの検討では、「の」の無助詞と見ていい多くの例は、総主文の無助詞化と共通するところが多い。

総主文の無助詞化は「は」「が」のいずれに対応する部分でもむ助詞化が可能であるが、「が」があると不自然になる場合があり、このことと関連させて、次章では《ゼロ助詞》の機能を考察する。

## 5. 《ゼロ助詞》の機能

### 5. 1. 脱焦点化機能

ある特定の場面では、《ゼロ助詞》が適切で助詞があると逆に不自然になるということは、早くから指摘されてきた。

155a) 【暑い日。外から汗だくで帰ってきた子どもに親が尋ねる】

「お水ほしい？」

155b) 【暑い日。外から汗だくで帰ってきた子どもに親が尋ねる】

? 「お水がほしい？」

外から戻ってきた子どもがのどが渴いているだろうと考えて、親が尋ねるなら「お水ほしい？」のほうが自然である。「お水がほしい？」というのは、「ほしいものは水なの？」といった意味合いが前面に出る。ただ、のどが渴いているときには普通水を飲むということもあり、また、家に戻った子どもに親が何か飲み物を与えることが十分あり得ることだということもあり、「お水なの？」といった趣旨で尋ねることが不自然だとは言えない。(155b) が至極自然だとも言えないものの、逆にひどく不自然でもないのは、こういった事情によるものだろう。次の例では違いがもっと鮮明である。

156a) 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て、言う】

「ケーキほしい？」

156b) 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て、言う】

\* 「ケーキがほしい？」

前者では「ケーキ」に焦点があたっていることがはっきりする。この場面で、母親が聞きたいことは、「ほしい」が「ケーキ」であるかどうかということではなく、「ケーキ」について子どもたちが「ほしい」と思うかどうかということであり、「ケーキ」と「ほしい」は情報として同じ重みを持っていると見ることができる。(156b)では、「ケーキ」に焦点があたってしまい、そのために「ほしい」が前提として解釈されることになっている。このことが、(156b)を不自然なものにしている。また、談話における知識の新旧が《ゼロ助詞》の可否に影響するかというと、(156)に関しては影響するとは言えない。(156)では、「ケーキ」が新知識として導入されているが、これ以前に、「ケーキ」の知識を与えても特に状況は変わらない。

157a) 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て、言う】

「ねえ、ケーキ $\phi$ もらったんだけどね。どう？ ケーキ $\phi$ ほしい？」

157b) 【母親が居間にいる子どもたちのところに来て、言う】

\* 「ねえ、ケーキ $\phi$ もらったんだけどね。どう？ ケーキがほしい？」

(157b)の不適切さはやはり変わらない。唐突に提示するかといったことは《ゼロ助詞》の使用にこの場合関わっていない。

ここでは、《ゼロ助詞》が情報として同じ重みを持つように作用していると見ることにする。「情報としての重み」は必ずしも《焦点(focus)》と全く同じことを意味しないかもしれないが、《ゼロ助詞》がつくことで「が」のある名詞句に対する焦点が解消されていると解釈すれば、《ゼロ助詞》の機能は《脱焦点化(defocusing)》と見ることが可能である。以下、この観点から考察・検討していく。

まずは、以下のような定義を与えておくことにする。なお、NP は名詞句、CM は格助詞、 $\phi$ はこれまで通り《ゼロ助詞》、Pred は述部要素である。また、InfoP(x)は「それを含む文における、xの情報としての重要度」を意味する表示形式とする。

158) 《ゼロ助詞》の脱焦点化に関する仮説

《ゼロ助詞》は脱焦点化機能を有する。脱焦点化機能とは、NP-CM-Pred という形式の文の中で、NP が最重要情報である、すなわち、InfoP(NP) > InfoP(Pred) が成り立つ、と解釈されるのを回避する機能である。従って、NP- $\phi$ -Pred という文では、情報の重要度は InfoP(NP)  $\leq$  InfoP(Pred) と解釈される。

たとえば、(157)のような違いは「が」に限らない。「を」に関しても見ることができる。

159a) 【帰宅したばかりの子どもに母親が尋ねる】

「ねえ、ご飯φ食べる？」

159b) 【帰宅したばかりの子どもに母親が尋ねる】

\* 「ねえ、ご飯を食べる？」

160a) 【友人が遊びに来ている。話題が途切れたところで、言う】

「テレビφ見る」

160b) 【友人が遊びに来ている。話題が途切れたところで、言う】

\* 「テレビを見る」

これらは、「食べるものはご飯か?」「見るものはテレビか?」と尋ねる場面ではない。「ご飯」と「食べる」、また、「テレビ」と「見る」が情報として同じ重要性を持っていなければならない。「何か食べるのか? 食べるのではあればそれはご飯か?」という2つの事柄について同時に尋ね、同時に答えが得たいのである。いずれかが優先されるわけではないのである。

161) 【教室で。友人の机の上にある本を指さして言う。本はその時点で初めて見た本】

\* 「その本をもう読んじゃったの?」(再掲 = (45a))

162) 【知人宅へ付け届けに行き、挨拶の後、言う】

\* 「どうぞ、これを召し上がってください」(再掲 = (46a))

先に検討したこれらの誤用例も、「その本」や「これ」に焦点があると論理的におかしいからだと説明できる。つまり、「読み終えてしまったのはほかならぬその本か?」や「召し上がっていただきたいものはこれです」という意味では不適切だからである。しかし、もしも、そういった意味合いで用いたいのであれば、逆に「を」が必要になるはずである。以下の例で検討してみよう。

163a) 【呼び鈴が鳴り、玄関に出るとパンフレットを手にセールスマンが立っていて、こう呼びかける】

「本日は、こういうものをご紹介にあがりました」

163b) 【呼び鈴が鳴り、玄関に出るとパンフレットを手にセールスマンが立っていて、こう呼びかける】

\* 「本日は、こういうものφご紹介にあがりました」

セールスマンは、何かを売るために来ていることは常識的に理解できるし、何かの商品を紹介することがその訪問の目的であることもいわば自明のことである。従って、「紹介したいものはほかならぬこれなのです」という意味合いの方が却って適切なのである。これ以外では、助詞のついている名詞句に焦点があたるべき時に《ゼロ助詞》が不適切になるという、いわば逆向きの証拠はないのだろうか。

164a) 【弟がテレビをつけっぱなしにして、ステレオを聴いているので、姉がやって来て「テレビφ消してよ」と言う。ところが、弟はステレオの方を消してしまう。そこで、姉が

言う】

「テレビを消してよ」

164b) 【弟がテレビをつけっぱなしにして、ステレオを聴いているので、姉がやって来て「テレビ $\phi$ 消してよ」と言う。ところが、弟はステレオの方を消してしまう。そこで、姉が言う】

\*「テレビ $\phi$ 消してよ」

この場面では、「消すのは、ステレオではなく、テレビだ」という趣旨である。この場合、予想通り《ゼロ助詞》は不適切で「を」があるほうが自然である。

165a) 【お菓子を2つの器に入れている。母親が一方を指さして「これはお客様の分だから、あなたはそっちね」と子どもに言う。ところが、子どもは客用のお菓子を食べようとする】

「そっちを食べてよ」

165b) 【お菓子を2つの器に入れている。母親が一方を指さして「これはお客様の分だから、あなたはそっちね」と子どもに言う。ところが、子どもは客用のお菓子を食べようとする】

???「そっち $\phi$ 食べてよ」

この場面でも、やはり「こっち」ではなく「そっち」という意味であり、焦点があたっているために、前者の方が適切となる。ただ、焦点をあてるには、当該部分を強く発音することで音声的にもある程度代替可能な実現法がある。(165b)も「それ」を強く発音すればそれほど不自然ではなくなる。しかし、全く強勢を与えられないと不自然である。このことは、(164)でもある程度当てはまる。

先に 3.11. で触れた大谷(1995a)では、「発見の状況において、ヲ格の名詞句が旧情報となる場合」に「ハもヲも使えない文」になるとして、以下の例(大谷(1995a:64))をあげている。

166) (山田のあこがれの女性の薬指に指輪がはめられているのを発見して)

佐藤：あっ、指輪  $\phi$  / を / \*は  $\phi$  はめているよ。

山田：えっ、ほんと？

167) (山田がその女性に送った(ママ)指輪を、ちゃんとはめていてくれるかどうか、佐藤に見てもらっている)

山田：どうだ。見えるか？

佐藤：指輪  $\phi$  / ?を / \*は  $\phi$  はめているよ。

この2つの用例は、《ゼロ助詞》の脱焦点化機能で説明可能である。(166)では、「指輪」と「はめている」では、いずれも重要な要素である。いずれか一方でも欠けると意味をなさなくなる。情報の重みが「指輪」と「はめている」の双方に等分に配分されている、つまり、InfoP

(指輪) = InfoP (はめている) という関係になっていると考えれば「指輪φはめているよ」が説明できる。また、この場面では「指輪をはめているよ」。これは先の仮説に従って考えると、InfoP (指輪) > InfoP (はめている) , ということになる。指輪は通常指にはめるものである。もしも、指輪をくわえていたり、捨てているとすれば、常識では推定できない分、情報の重みは増し、逆転して述部の方がより重要な情報になるであろう。しかし、ここでは「指輪」に気づいたという場面であり、その指輪は常識的推定の範囲内といえる「指にはめられた」状態にあるというわけだから、どちらかといえば「指輪」のほうが情報として重くても問題はない。(167)は、「指輪」はなくても構わない発話である。つまり、「はめているよ」だけでも十分応答して成り立つ。このことから分かるように、明らかに、InfoP (指輪) < InfoP (はめている) が成り立つ。よって、《ゼロ助詞》でなければならない<sup>44)</sup>。

次のような例でも同じことが言える。

168a) 【知り合いにその日初めて会う。挨拶を交わした後の第一声】

「私φ風邪を引きましたね」

168b) 【知り合いにその日初めて会う。挨拶を交わした後の第一声】

\* 「私は風邪を引きましたね」

168c) 【知り合いにその日初めて会う。挨拶を交わした後の第一声】

\* 「私が風邪を引きましたね」

これは、従来言われてきたように、「は」の対比解釈を避け、「が」の総記解釈を避けると、《ゼロ助詞》しか残らないとも説明できるだろう。これは、消去法で《ゼロ助詞》を選ぶという発想に結びつく。しかし、(168a)は「風邪を引きましたね」と「私」を完全に消去した形でも成り立つことから、InfoP (私) < InfoP (風邪を引いた) という関係が成立していると言える。この点から、「私」が表面に出る場合には《ゼロ助詞》を用いて脱焦点化していると説明することも可能だろう。本稿は、このように発話者の被解釈意図（こう解釈してもらおうという意図）によって、《ゼロ助詞》の選択がなされると考える。従って、場面によって選択が固定してくるとは考えない。菊地康人（1996：48）には、次のような指摘がある。以下、例文は、本稿の形式にあわせて引用する<sup>45)</sup>。

169a) 【OLが出勤直後に顔を合わせた同僚の OL に、自分から話を切りだして】

「私φ今朝定期券φ忘れちゃってね…」

169b) 【OLが出勤直後に顔を合わせた同僚の OL に、自分から話を切りだして】

\* 「私は今朝定期券φ忘れちゃってね…」

(169b)は、相手が上司であってもやはり不適切である。しかし、上司が部下に対して言うと

44) (167)における「を」の？という文法判断は、大谷のものであるが、加藤なら \* をつける。

45) 菊地 (ibid.) では、特に\*などは付していない。また、(170a)にあたるものは特に言及していない。

いう状況ではそれほど不自然ではない。

170a) 【部長が出勤して席に着くなり、傍らの OL に、自分から話を切りだして】

「私 $\phi$ 今朝定期券 $\phi$ 忘れちゃってね…」

170b) 【部長が出勤して席に着くなり、傍らの OL に、自分から話を切りだして】

「私は今朝定期券 $\phi$ 忘れちゃってね…」

菊地 (ibid.) の主張は、同じ場面でも言う人物と相手の関係によって「は」の有無の文法評価が異なるというところに主眼がある。これは、部長であれば、部下の状況を把握して気遣うのが自然であり、「みんなも会社にたどり着くまでにいろいろ苦労があったり、思い通りに行かないこともあろうけれども、それは私もおなじことで」という前提的な気持ちがあって、「私は今朝定期券 $\phi$ 忘れちゃってね…」と言えるのであり、「は」があることでそういった前提となる気持ちがほの見えることが部長に関しては不自然ではないと考えることができる。これに対して、一課員である OL が所属する部や課の全員（部課長を含めて）に同じような配慮をしているとすると、これはその立場にひどく似つかわしくないと判定されるのである。

## 5. 2. 《ゼロ助詞》の数と文構造

無助詞の名詞句は、多い場合には同一の切ないに3つ以上出現することもあるが、実際の発話では1つのことも多い。ここでは、《ゼロ助詞》の脱焦点化機能の仮説が広く適用できるかどうか、1つの節の中に名詞句が1つしかない場合と、1つの節の中に名詞句が複数個存在する場合とで比較検証してみることにする。

### 5. 2. 1. 名詞句が1つの文

《ゼロ助詞》が1つしかない文を検討する。まず、指示詞の介在の有無との関連で考察する。

171a) 【散歩していて、チューリップが枯れているのを見つけて、言う】

「あっ、チューリップ $\phi$ 枯れてる」

171b) 【散歩していて、チューリップが枯れているのを見つけて、言う】

「あっ、チューリップが枯れてる」

172a) 【散歩していて、チューリップが枯れているのを見つけて、言う】

「あっ、このチューリップ $\phi$ 枯れてる」

172b) 【散歩していて、チューリップが枯れているのを見つけて、言う】

\* 「あっ、このチューリップが枯れてる」

(171) では「が」が、《ゼロ助詞》でも、どちらでも成り立つ。ここは、「が」があって、「ほかの草花ではなく、ほかならぬチューリップが枯れている」という意味になることに無理がなく、また、InfoP (枯れてる) = InfoP (チューリップ) とすることにも無理がない。また、

「大事にしていたチューリップだったのに」という一文がこの発話に後続するのだとすれば、「チューリップが枯れてる」と「が」のある発話の邦画より自然であるということも、我々の仮説と符合する。逆に、特にショックに思う様子もなく、「別にどうでもいいけど」と続くのであれば、「あっ、チューリップが枯れてる」のほうがより結びつきやすいと感じるのも、同じく仮説を支持することになる。

では「この」というダイクシスを伴った場合はどうだろうか。発見した時点の発話だとすれば、(172b)は不適切である。大場(1994)では、同種の問題について尾上(1987)を参考に、「場面照応のついた名詞句は述語に関係なく存在が固定されてしまう」が故に、描写文として(ひとまとまりの事実として提示して)述べたいという意図が損なわれてしまうからだとしている。これに対して、本稿のアプローチはこうである。「が」があることで、InfoP(枯れてる) < InfoP(このチューリップ)という関係が成立する。つまり、「このチューリップ」に焦点があたることになり、「枯れているのは、ほかのチューリップではなく、このチューリップだ」という情報構造の伝達になる。「ほかならぬこのチューリップ」ということなので、「このチューリップ」は「チューリップという種の中でもこの個体だ」という意味合いになってしまう。それが発見という文脈の中で発話されれば、当然、「この付近に枯れたチューリップの個体が存在している」という前提知識が存在していることになり、全体的に与えられた文脈からずれてしまうのである。さらに単純化して言うと、発見の文脈でダイクシスを使うと、一種の個体同定の判断を下すことになり、それゆえダイクシスを伴う NP(この場合は「このチューリップ」)に焦点があたる。焦点を当てておきながら、《ゼロ助詞》で脱焦点化しているわけだから、矛盾する作用を同時に実現しようとしていることになる。よって、一方があれば一方は排除される。また、(172a)では、InfoP(枯れてる) = InfoP(このチューリップ)ということであるから、この種の齟齬は生じない。次に、(173)を比較しよう。

173a) 「ヨーロッパが行った？」

173b) 「ヨーロッパに行行った？」

173c) 「ヨーロッパは行った？」

《ゼロ助詞》の(173a)では、InfoP(ヨーロッパ) = InfoP(行った)、である。格助詞のついた(173b)では、InfoP(ヨーロッパ) > InfoP(行った)であり、「行ったのはヨーロッパか」といった情報の重要度の偏りが感じられる。(173a)の意味は、「は」の分説性を感じなければ(173c)に近いと言っていいだろう。

次の(174)では、「パチンコで」だけでも答えとして成り立つことから分かるように、焦点は「パチンコ」にある。

174a) 【「負けちゃったよ」と言ったところ、「なにで負けたんだよ？」と聞く友人に】

??? 「パチンコが負けたんだよ」

- 174b) 【「負けちゃったよ」と言ったところ、「なにで負けたんだよ?」と聞く友人に】  
「パチンコで負けたんだよ」

この場合、InfoP (パチンコ) > InfoP (負けた), という関係が成り立たねばならない。よって、格助詞が必要になる。InfoP (パチンコ) ≤ InfoP (負けた), という関係になる《ゼロ助詞》は不可になる。

全体に名詞句が節中に一つしか存在しない文では、その名詞句と述部の情報としての重要度を比較すればすむので、検討は簡単である。また、単純である分、本稿の仮説の有効性も簡単に確認できた。しかし、名詞句が複数存在する分では、情報構造は非常に複雑である。それを次節で検討する。

### 5. 2. 2. 名詞句が複数存在する文

名詞句が2つあるもののうち、主要なパターンから検討していくことにする。

#### 5. 2. 2. 1. …ハ…ガ…のパターン

いわゆる総主文タイプの文である。

- 175a) 【つらそうな顔をしている友人に「どうしたの?」と尋ねる。友人が答える】  
「俺<sup>φ</sup>虫歯<sup>φ</sup>痛くてさ。なにも食べられないんだよ」
- 175b) 【つらそうな顔をしている友人に「どうしたの?」と尋ねる。友人が答える】  
\* 「俺は虫歯<sup>φ</sup>痛くてさ。なにも食べられないんだよ」
- 175c) 【つらそうな顔をしている友人に「どうしたの?」と尋ねる。友人が答える】  
「俺<sup>φ</sup>虫歯が痛くてさ。なにも食べられないんだよ」
- 175d) 【つらそうな顔をしている友人に「どうしたの?」と尋ねる。友人が答える】  
\* 「俺は虫歯が痛くてさ。なにも食べられないんだよ」

(175b) (175d) のように「は」があると、どうしても「は」の分説性のために対比的な解釈が生じる。従って、ここでは不自然な発話となる。また、(175c) (175d) のように「が」があると、やや強意のニュアンスはあるが先ほど見たように「痛い」ことが前提と理解されるわけではない。しかし、ここでは、(175c) のように「が」がある発話の方が自然である。この場合、「虫歯」が相手の質問に対する応答として最も重要な要素であり、焦点が当たることが自然なのである。実際に応答として「虫歯!」だけでも成立するだろう。

#### 5. 2. 2. 2. …ガ…ヲ…のパターン

「が」が「は」となりうることも考えて、以下の6通りを検討する。

- 176a) 【兄弟が喧嘩をしているところに母親が「どうしたの?」と割ってはいる。兄が弟を指

して言う】

？「俊 $\phi$ 僕のCD $\phi$ 持ってっちゃたんだよ」

176b) 【兄弟が喧嘩をしているところに母親が「どうしたの？」と割ってはいる。兄が弟を指して言う】

「俊が僕のCD $\phi$ 持ってっちゃたんだよ」

176c) 【兄弟が喧嘩をしているところに母親が「どうしたの？」と割ってはいる。兄が弟を指して言う】

「俊 $\phi$ 僕のCDを持ってっちゃたんだよ」

176d) 【兄弟が喧嘩をしているところに母親が「どうしたの？」と割ってはいる。兄が弟を指して言う】

「俊が僕のCDを持ってっちゃたんだよ」

176e) 【兄弟が喧嘩をしているところに母親が「どうしたの？」と割ってはいる。兄が弟を指して言う】

？「俊は僕のCD $\phi$ 持ってっちゃたんだよ」

176f) 【兄弟が喧嘩をしているところに母親が「どうしたの？」と割ってはいる。兄が弟を指して言う】

？「俊は僕のCDを持ってっちゃたんだよ」

いずれも、格助詞「が」や「を」がつくと、総記的な解釈が行われやすく、焦点の当たった解釈が可能になる。よって、格助詞のついた名詞句は強調された感じがする。「は」では、やはり、「僕はなにも悪いことしていないのに、俊は僕のCDを…」というような対比的な解釈になる。(176b)のように「俊が僕のCD $\phi$ 」とすると、焦点は「俊」にあり、こういった行動をとったのはほかならぬ「俊」であってという解釈になりやすいのに対し、(176c)のように「俊 $\phi$ 僕のCDを」とすると俊が行動をとった対象が「僕のCD」であることを伝える情報構造となる。(176d)のように「俊が僕のCDを」とすると、論理関係は明確になるが、一方が強調されるという形にはならない。やはり、(176a)のよう両方を《ゼロ助詞》で置き換えると、InfoP(俊) = InfoP(僕のCD) = InfoP(持っていった)という平坦な情報の重要度になり、淡々と事実を描写して伝えるだけで、どこに言いたいことがあるのか分からない感じなる。従って、喧嘩をしている場面にしてはひどく冷静で伝えたい部分の明瞭でない受け答えとなり、やや不自然な感じがする。

おもしろいのは、「僕のCDを持ってっちゃたんだよ」と「を」のある方がNPとPredの結合が論理関係がはっきりと強まるかということ、逆だという事実である。NPに焦点が当たること、InfoP(NP) > InfoP(Pred)となり、情報の重要度の偏りが生じるために、異質な要素の結合ということになり、それほど緊密な結合にならないのである。「僕のCD $\phi$ 持ってっちゃ

たんだよ」のほうが、無音形で連続して発話されると言う事情もあるのだろうが、InfoP（僕のCD）=InfoP（持ってった）という、いわば平坦で均質な情報構造となり、「を」がある場合に比べてやや緊密な結びつきになっている。

### 5. 2. 2. 3. …が…二…のパターン

これも同じように「が」と「は」の交代を考えて、6通りのパターンを検討しよう。

177a) 【偶然駅で会った同級生に「吉田君さあ、今度のクラスのコンパ♯行くよね?」と尋ねられて、答える】

「俺♯最近学校♯行ってないんだ」

177b) 【偶然駅で会った同級生に「吉田君さあ、今度のクラスのコンパ♯行くよね?」と尋ねられて、答える】

\* 「俺が最近学校♯行ってないんだ」

177c) 【偶然駅で会った同級生に「吉田君さあ、今度のクラスのコンパ♯行くよね?」と尋ねられて、答える】

「俺♯最近学校に行っていないんだ」

177d) 【偶然駅で会った同級生に「吉田君さあ、今度のクラスのコンパ♯行くよね?」と尋ねられて、答える】

\* 「俺が最近学校に行っていないんだ」

177e) 【偶然駅で会った同級生に「吉田君さあ、今度のクラスのコンパ♯行くよね?」と尋ねられて、答える】

\* 「俺は最近学校♯行ってないんだ」

177f) 【偶然駅で会った同級生に「吉田君さあ、今度のクラスのコンパ♯行くよね?」と尋ねられて、答える】

\* 「俺は最近学校に行っていないんだ」

基本的に「俺」はなくてもよい発話である。つまり、情報として重要ではないわけで、音形にして発話に出すのであれば脱焦点化して《ゼロ助詞》を使う必要が出てくる。「学校」は、この場面では焦点化してもいいし、「学校♯行ってない」とNPとPredの情報の重さをそろえてもいい。相手の発話の内容が「学校に関連すること」なので、「学校に」と「に」をつけることが可能なのである。「最近学校に行っていないから、その話題は知らない」ということであるにせよ、「最近学校に行っていないので、クラスの行事に関わるつもりはない」ということであるにせよ、焦点化することは論理的に無理がないわけである。

5. 2. 2. 4. …ヲ…ニ…のパターン

「…を…に…」という文であれば、「…が」という主語が現れうるのだが、ここではそれは考えず、発話にヲ格名詞句とニ格名詞句のみが現れる場合について考察する。

178a) 【部室を出るときに鍵をロッカーに入れておく決まりになっている。鍵をロッカーに入れて帰ろうとしたところに、同級生が部室へと来たところに会った。そこで彼に言う】

「鍵 $\phi$ ロッカー $\phi$ 入れといたよ」

178b) 【部室を出るときに鍵をロッカーに入れておく決まりになっている。鍵をロッカーに入れて帰ろうとしたところに、同級生が部室へと来たところに会った。そこで彼に言う】

\* 「鍵をロッカー $\phi$ 入れといたよ」

178c) 【部室を出るときに鍵をロッカーに入れておく決まりになっている。鍵をロッカーに入れて帰ろうとしたところに、同級生が部室へと来たところに会った。そこで彼に言う】

? 「鍵 $\phi$ ロッカーに入れといたよ」

178d) 【部室を出るときに鍵をロッカーに入れておく決まりになっている。鍵をロッカーに入れて帰ろうとしたところに、同級生が部室へと来たところに会った。そこで彼に言う】

? 「鍵をロッカーに入れといたよ」

また、これらは「を」を「は」で代替する文も考えることができる。

178e) 【部室を出るときに鍵をロッカーに入れておく決まりになっている。鍵をロッカーに入れて帰ろうとしたところに、同級生が部室へと来たところに会った。そこで彼に言う】

「鍵はロッカー $\phi$ 入れといたよ」

178f) 【部室を出るときに鍵をロッカーに入れておく決まりになっている。鍵をロッカーに入れて帰ろうとしたところに、同級生が部室へと来たところに会った。そこで彼に言う】

「鍵はロッカーに入れといたよ」

ここでは、相互に「鍵」の決まりについての理解があるので、「は」を使うことが可能である。また、その意味で「鍵」は主題化していると見ることもできるだろう。しかし、(178b)のように「鍵をロッカー $\phi$ 」とすると「ロッカーに入れておいたのは鍵である」という妙な情報構造になる。よってここでは不自然である。同じく(178c)も「鍵」の在処に関して焦点が当たり、「鍵を入れたのはロッカーである」という意味合いになる。ここは、鍵の在処を伝えることはそれほど不自然ではないので、非文にはならないだろうが、通常の状態では「鍵はロッカーにある」と知っている相手にはやや的外れな発話になってしまう。

また、(178)の例文では、「…を…に…」という順序しか可能にならない。これは、主題化するとすれば「鍵」のみであり、「ロッカー」は主題化し得ないからである。部室の近辺で会った友人が「おい、鍵は?」と聞くことはあっても、「\*おい、ロッカーは?」と言うことはあり得ない。逆に言えば主題化可能であればニ格名詞句が先行することもあり得るといことになる。

それを次節で見よう。

### 5. 2. 2. 5. …ニ…ヲ…のパターン

ニ格名詞句が主題化する例とは、たとえば、次のようなものである。

179a) 【家具を搬入しようとしていた場所に荷物を置こうとした弟に言う】

「そこφ荷物φ置くなよ」

179b) 【家具を搬入しようとしていた場所に荷物を置こうとした弟に言う】

「そこに荷物φ置くなよ」

179c) 【家具を搬入しようとしていた場所に荷物を置こうとした弟に言う】

??? 「そこφ荷物を置くなよ」

179d) 【家具を搬入しようとしていた場所に荷物を置こうとした弟に言う】

「そこに荷物を置くなよ」

179e) 【家具を搬入しようとしていた場所に荷物を置こうとした弟に言う】

「そこは荷物φ置くなよ」

179f) 【家具を搬入しようとしていた場所に荷物を置こうとした弟に言う】

「そこは荷物を置くなよ」

(179c) のように「そこφ荷物を置くなよ」とすると、「荷物ではない、別のものを置かなくちゃいけないのか」と思ってしまう。ここでは、「荷物」を焦点化するとおかしいのである。しかし、それ以外では「荷物」だけに焦点が当たるといことがないので、特に不自然な発話にはならない。「そこ」は焦点化しても論理的に無理がない。(179e)(179f)のように、「そこは」とすると「は」の分説性のために、「別の場所ならかまわないが、そこだけは…」といった解釈になるのがふつうだろう。

### 5. 2. 2. 6. 3つ以上の名詞句を含む文

ここまで、格助詞があれば談話上その名詞句は焦点化され、《ゼロ助詞》がその焦点をはずす役割をしているという基本線で一通りの解釈が可能であった。

3つ以上の NP が含まれる場合に、《ゼロ助詞》はどう機能するのだろうか。名詞句が2つでも情報構造としては複雑であるが、3つ以上ではかなり複雑になる。まず、「の」を含む例文から検証しておこう。

180) 【消したはずのテレビがついているのを見て、独り言を言う】

「俺φテレビφ電源φ切ったはずだけどなあ」

これは、実は「切ったはずだけどなあ」だけでもかまわない発話である。

181a) 【友人に図書館の借りた本を見せながら】

「私φこの本φ表紙φ破っちゃったの」

181b) 【友人に図書館の借りた本を見せながら】

「私φこの本の表紙φ破っちゃったの」

181c) 【友人に図書館の借りた本を見せながら】

\* 「私φこの本φ表紙を破っちゃったの」

181d) 【友人に図書館の借りた本を見せながら】

\* 「私φこの本の表紙を破っちゃったの」

(181) では、「を」がつくと不自然である。(181c) (181d) では、「破った」ことが前提化してしまい、おかしい。(181b) は「この本の表紙」とすることで、「この本の表紙」が一つの対象として示されるのに対し、(181a) では「この本」に関して「表紙」の部分で「破った」という感じが強い。いずれの文でも「私」はそもそもなくてもよい要素である。また、(181a) が成り立つことから分かるように、本を見せながらであれば「破っちゃったの」だけでも発話は成立する。

182a) 【弟がいなくなったパソコンを前に姉に言う】

? 「俺φこのパソコンφ研究室φ寄付しようと思うんだ」

182b) 【弟がいなくなったパソコンを前に姉に言う】

「俺φこのパソコンφ研究室に寄付しようと思うんだ」

182c) 【弟がいなくなったパソコンを前に姉に言う】

\* 「俺φこのパソコンを研究室φ寄付しようと思うんだ」

182d) 【弟がいなくなったパソコンを前に姉に言う】

「俺φこのパソコンを研究室に寄付しようと思うんだ」

この文では、「研究室」に焦点が当たるのが自然で「どこに寄付するか」という研究室に」というのが論理的に分かりやすい。(182c) のように「このパソコン」を「研究室」よりも、重要な情報として提示すると、「研究室に寄付する」ことが前提化してしまい、論理的に不自然になる。(182a) は、どの要素も情報の重要性という観点では均等になっているが、要素が多いため、やや据わりが悪い。

このほかデ格を文頭に出して3個以上の名詞句を含む文の無助詞化を考えることができるが、この場合デ格名詞句は主題化してしまう。

183) A大学φ中核派φ反対集会φ開くんだって。

このような例では、「A大学」は「A大学は」あるいは「A大学では」といった主題性の近い要素になっている。また、この文でも3つも無助詞では、情報の重みは各要素で均一であり、格助詞がつくと、その名詞句は焦点化される。

## 6. 結語 — 《ゼロ助詞》と省略は区別されるか—

本稿では、《ゼロ助詞》の談話における機能を様々な角度から考察した。そして、その機能が脱焦点化 (defocusing) であるという仮説を立て、それを多くの例文に当たり、検証してきた。また、格助詞の用法ごとに《ゼロ助詞》での代替が可能かを検証してきた。そして、かなり多くの場合に、この脱焦点化仮説が有効であることを確認した。

本稿では、3.12. 節で述べたように無助詞をすべて一律に《ゼロ助詞》として扱ってきた。その中心的な理由は、単なる省略とされる用法とそうでない、いわば意味のある用法を截然と区別することは不可能であるということであった。もとより、本稿は網羅的にあらゆる場合や構文パターンを分析したものではない。従って、さらに分析の範囲を拡大すれば、両者を区別する分水嶺は見いだされるのかもしれない。その可能性を否定するつもりは全くない。しかし、ここまで分析をしてきても、本稿で言う《ゼロ助詞》を2つに分ける必要はないと思う。確かに、無助詞と有助詞の差が極めて小さく、ニュアンスの差や文体の差としてよいような場合がないわけではない。とはいえ、ある文脈でいずれも成り立つというケースがあることは十分想定できるし、また、その場合に両者の意味の差があまり際立たないということも十分あり得る。これは、助詞があってもなくてもあまり変わらないから「単なる省略」だという判断で処理をするより、両者の違いが潜在的にはあるものの、その差異を表面化させる文脈や文構造になっていないせいであると判断するほうが自然ではないだろうか。形態の違いが必然的に意味の違いになるという単純な一般化を行うつもりはないが、形態が違うのに意味が変わらないのだとすればそれを示すだけの強力な証拠が提示されなければならないと思うのである。しかも、これまでの研究では、その証拠になるだけの説明が提出されていない。加えて、本稿でのこれまでの検証から得た見通しでは、その種の証拠を得ることは難しく、「有機的無助詞」と「単なる省略」という、やや印象批評的な分類をたてるだけの意味があるとも思われないのである。

たとえば、先に両者の意味の差が少ない例とした以下の用例も、脱焦点化機能という観点で見れば、両方が同じ場面や文脈で成り立つことに無理がないと思われるものである。

184a) 【プロジェクトが人手不足で進んでいないことを聞いた同僚が言う】

「手伝おうか？ 人手が足りないんだろ？」 (再掲=(42a))

184b) 【プロジェクトが人手不足で進んでいないことを聞いた同僚が言う】

「手伝おうか？ 人手φ足りないんだろ？」 (再掲=(42b))

185a) 【学生が飯田先生を探している。「飯田先生はどこにいますか？」と聞かれた教官が答える】

「飯田先生は、研究室にいますよ」 (再掲=(61a))

185b) 【学生が飯田先生を探している。「飯田先生はどこにいますか?」と聞かれた教官が答える】

「飯田先生は、研究室φいますよ」 (再掲=(62a))

186a) 【友人同士の会話。「申し込みのこと詳しい人いない?」と聞かれて、答える】

「山下に電話しようか」 (再掲=(81a))

186b) 【友人同士の会話。「申し込みのこと詳しい人いない?」と聞かれて、答える】

「山下φ電話しようか」 (再掲=(81b))

(184)では、「人手」を強調して、プロジェクトになんらかの不足要素があつて暗礁に乗り上げることがよくあるという知識があれば「足りないのは人手だろ」という趣旨で言うことは十分あり得る。無論、InfoP(人手)=InofP(足りない)、という情報構造でも構わない。(185a)は、「どこにいるか」といふとまさに研究室にいる」という趣旨であり、質問の応答としては自然である。また、教官は研究室にいるかいないかという点がまず情報として重要であると考えれば、研究室という場所を提示するより、在室か不在かという情報の提供形式の方が望ましいと考えるかもしれない。とすれば情報構造は、InfoP(研究室)=InfoP(いる)、あるいはむしろ、InfoP(研究室)<InfoP(いる)、となるのが自然で、《ゼロ助詞》を選択することになる。(186a)でも、電話で誰かに聞くのは常識的で特に相手の意向を聞くまでもないが、相手を「山下」にすることでいいかどうか意向を知りたいということであれば、「に」という格助詞をつけることになる。また、InfoP(山下)=InfoP(電話する)、という情報構造であれば、電話で尋ねることも、その相手が山下であることも同時に提案することになる。

このように考えると、《ゼロ助詞》を使うことにはそれなりの談話効果がかならずあり、話者はそれを意図に応じて無意識に使い分けているのである。場面としては無助詞も有助詞もいずれも成り立つのであつて、より伝達意図・発話意図に近い形態を選ぶことが話者に与えられている自由だと考えるべきだろう。「無助詞と有助詞で違いがない」「単なる省略ということがある」という考えには、その主張の根拠の薄弱さにくわえて、こういった事情から与しがたいのである。

《ゼロ助詞》の機能には、まだ完全に分からない部分も多い。さらに多くの構文パターンなどをできるだけ多角的に綿密に分析していく必要があるだろう。本稿は、そのアウトラインにはなりうると思うが、今後の研究を待たなければならない部分が多いのも事実である。機会を改めて、論考を重ねたいと考えている。

参 考 文 献

- 石神輝雄 (1989) 「ハとガ -主題と主語-」『講座日本語と日本語教育第4巻』明治書院
- 井上史雄 (1992) 「社会言語学の方言文法」『日本語学 11-6』明治書院
- 梅原教則 (1989) 「助詞の構文的機能」『講座日本語と日本語教育第4巻』明治書院
- 大谷博美 (1995a) 「ハとヨと $\phi$  -を格の助詞の省略」『日本語類義表現の文法(上)単文編』宮島達夫・仁田義雄編, くろしお出版
- 大谷博美 (1995b) 「ハとガと $\phi$  -ハもガも使えない文」日本語類義表現の文法(上)単文編』宮島達夫・仁田義雄編, くろしお出版
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形 -自・他動詞の対応-」『国語学』70, 日本国語学会(再録『動詞の自他』須賀一好・早津恵美子編, ひつじ書房, 1995)
- 尾上圭介 (1987) 「主語にハもガも使えない文について」『国語学会予稿集』日本国語学会
- 尾上圭介 (1996) 「主語にハもガも使えない文について」認知科学学会第13回ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト(<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/onoe/html> よりdownload して入手)
- 甲斐ますみ (1991) 「『は』はいかにして省略可能となるか」『日本語・日本文化 17』
- 甲斐ますみ (1992) 「話者が『は』『が』なし文を発するとき」KSL12, 関西言語学会
- 景山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 加藤重広 (1991) 「固有名詞の本性」『東京大学言語学論集』11
- 加藤重広 (1993) 「日本語の形容表現」東京大学大学院修士論文(言語学)・未公表
- Kato, Shigehiro (1995) "On the Semantic Features of Japanese Adjectives" *Tokyo University Linguistics Papers 14*
- 加藤重広 (1996) 「言語の体系性 -動的言語観と静的言語観-」『東京大学言語学論集』15
- 加藤重広 (1997) 「日本語の連体数量詞と連用数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26
- 菊地康人 (1996) 「上下の言語学」『月刊言語』25-5
- 金水 敏 (1996) 「歴史的にみた『格助詞』の機能」認知科学学会第13回ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト(<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/kinsui/html> よりdownload して入手)
- 楠本徹也 (1992) 「ゼロ格の確立」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』日本語教育学会
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 杉本 武 (1986) 「格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』奥津敬一郎・沼田善子・杉本武, 凡人社

- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 城田 俊 (1983) 「文と語形成」『国語国文』52-7
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版
- 筒井通雄 (1983) 「『ハ』の省略」『月刊言語』13-5, 大修館書店
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版
- 仁田義雄 (1992) 「格表示のあり方をめぐって - 東北方言との対照のもとに」『日本語学』11-6, 明治書院
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格をもとめて」『日本語の格をめぐって』仁田義雄編, くろしお出版
- 丹羽哲也 (1989) 「無助詞格の機能 - 主題と格と語順-」『国語国文』58-10
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
- 丸山直子 (1995) 「話しことばにおける無助詞各成分の格」『計量国語学』19-8
- 丸山直子 (1996a) 「助詞の脱落現象」『月刊言語』25-1
- 丸山直子 (1996b) 「話しことばにおける無助詞各成分」認知科学学会第13回ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト(<http://www.sccs.chukyo-u.ac.jp/jcss/CONFs/maruyama/html> よりdownload して入手)
- 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける『無助詞』の機能」『日本語教育』80
- 藤原雅憲 (1991) 「話し言葉における助詞省略の効果」『平成3年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances*, Blackwell
- 益岡隆志・田窪行則 (1992<sup>2</sup>) 『基礎日本語文法 -改訂版-』くろしお出版
- 松下大三郎 (1928, 1930a) 『改撰標準日本語文法』紀元社 (勉誠社復刊本を参観)
- 松下大三郎 (1930b) 『増補校訂標準日本口語法』紀元社 (勉誠社復刊本を参観)

付記: 大場美穂子氏には, 大場 (1994), 尾上 (1987) の入手など, いろいろと手を煩わせた。  
記して学恩に感謝する。